
気になるアイツは.....M男！？

楳沙織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気になるアイツは…… M男！？

【Zコード】

N7752L

【作者名】

楳沙織

【あらすじ】

彼氏いない暦=歳の数、という女 京野琴海。きょうのことにとみ

ある日、彼女は思い切って告白してみよう と決意する。しかし、目を付けた人物は物凄く人気がある人であった。更に、彼には思いもよらぬ秘密があつて……？ 「私、こんな展望んでませんん~つ！」『恋愛初心者マーク』である彼女の恋が、今始まる。 こちらは、サイト「Honey Mouse」から転載しています。

れんあい【恋愛】とは。

「意」男女が互いに相手にひかれて愛しあうこと。

携帯辞書から抜粋。

私の名前は京野琴海。

彼氏いない歴²年齢の数といつ、独身女の22歳（処女）。別に中学高校が女子校というわけでもなく、男子も普通にいる共学であつた。

ただ、告つた事もなれば、告られた事もなく……いいなーと思つ人は『お友達』止まり。

そんな事がずう一つと続いて、今まで異性と付き合つ事なく過ぎて來た。

やつぱり、友達が彼氏を作つていちゃ いらっしゃるのを見ると、私も彼氏が欲しいなーと思つ。

素敵な恋愛がしたいっ！

つて、誰だつてそう思つじやない？

だから、気になつた人が出来たら先ずは思い切つて告白してみよう！ と考えた。

しかし、だ。

いざ告白しようと思つても、私が気になる人はほとんどが『彼女有り』。

何故なら。

好きになる人が、ほとんどイケメンだから。

確かに、私自身、自分が思つてゐる以上に面食いだと思う。

友達にも、「レベル高っ！」って言われたし。

顔が良ければ内面もいいとは限らないが、普通の人よりカッコいい人に目が自然に行つてしまふ。

ある友達に、「彼女がいたとしても、気持ちだけでも伝えてみたら？」と言われたが、絶対嫌だと断つた。

理由の1つとしては、平々凡々の外見で、自分が相手にとつて魅力的に思える部分を何一つ持つていなかつた。

そんな私が、美人な彼女がいる人に告白した所で、絶対振り向いてくれるはずもなく、こつぴどくフラれてお終いに決まつている。

そんなこんなで、私は高校を卒業をしてからこの年になるまで、誰ともお付き合いする事なく過ごして來た。

で・も！

この世に生を受けて22年と3ヶ月。

漸く私にも遅い春がやつて來ようとしていた。

先日、アメリカにある支店の方から、モデルの様にカッコいい人がやって來たのだ。

そりやもう、女性の皆さんのはその人に釘付けになりましたよ。いつも以上にメイクが気合い入ってるし、用事が無いのにその人の所に行つては気を引こうと躍起になつっていた。

まあ、無理も無い。

彼 アレク・クロフォードさん（27歳）は、襟足と前髪が少し長い、プラチナシルバーの髪。見れば引き込まれそうなターコイズブルーの瞳が特長的。

身長は西洋人らしく、190cm。スポーツをしているのか、細身だけどなよなよしている感じがしない。

中性的な顔立ちだが、だからといって女っぽいわけでは無く、意外と中身は男前。

仕事をする時の真剣な表情は、クールでカッコいい。

しかし、一旦仕事から離れると、柔らかい表情で周りの人達に接していた。

それに、遠くにいても聞こえて来る少し低い声は、腰にくるくらいい艶やかだ。

そんな眉目秀麗で人当たりが良く、仕事が出来るのに今は『彼女無し』で、尚且つ高給取りだという人を放つておく人がいるであろうか。

いや、いない。

現に、我が社1の美人と言われている香川みのりさんも、彼を狙つていると噂になつていた。

ハツキリ言つて、私が告白しても99%の確率でフラれるだろう。

まあ、すつごい好きつて訳でもないし、告白して振られたらそれ

まだだ！

私はそつ思つようこじた。

でも。

もしも……もしも、奇跡が起きて、残りの1%といつ確率で彼と付き合えたなら、

小説にも負けないような、素敵な恋愛をしたいとは考えていたのであった。この時の私は

告白をしよう。

と、思つたはいいが……

チラリと視線を室内の中央に向ける。

そこには、数人の美女達に取り囲まれているクロフォードさんが見えた。

ち、近付けない……

クロフォードさんにこぞり告白しようと思つても、彼の周りには何時も数人の人がいて、話し掛ける事さえ出来ない。

いいなあー、私も彼と話してみたいなあー。

と彼らを眺めていたら、

「琴海、そんな難しそうな顔して、何見てんの？」

隣の席のあつちゃん 原田あつ子が、不思議そうな顔をして私を見ていた。

「あ、あつちゃん。いや……別に何でも……」

「何でも無さそうな顔をしていたから、声を掛けたのよ。一体何を見て……」

「…………」

「はつはあ～ん」

あつちゃんは、私が見ていた方向 クロフォードさんがいる方に視線を向けてから、にやにやした顔で私に振り向いた。

うわあ～……なんつー顔をするんですか、貴女は。

少し身体を引いた私を気にする事も無く、あつちゃんは一シシリと笑った。

「これまた、随分とレベルの高い方に田を受けたもんだこと」

「うつ……」

「で？ どうするの？」

「……どうするとは？」

「だから、あの銀髪キラキラ男に、どうやって告るかって事」

「……まだ決めてない」

あつちゃんは、私と同じ時期に入社した同期だ。

彼女は大卒。私は高卒入社なので年齢はあつちゃんの方が上なのだが、研修期間に意気投合してからは、親友の様にずっと仲良くしている。

そんなあつちゃんは、私が『面食い』である事を知つていて、イケメンの『彼女無し』の男がいたら即告白します、という宣言も聞いていた。

だから、クロフォードさんを見詰めていた私が、彼に告白すると氣付いたのだ。

「早くしないと、他の雌豹達に横から搔つ攫われるわよ？」

机に肘を置いて、頬杖を付きながらそう言つたあつちゃんに、私は頬を膨らませた。

「だあーって、彼に声を掛けようにも、常に数人の人が周りを取り囲んでるのよ？ 声を掛けるどころか……告白なんて無理だよ」 ガクーンと頃垂れる私に、あつちゃんは「まあ、頑張れ」と、とてもアッサリとした反応を寄越した。

私はもう一度、他の人達と楽しく喋っているクロフォードさんを見てから、溜まっている仕事を片付けるべく、パソコンに視線を戻したのであった。

気になる人が出来ると、その人の事を一日中考える様になる。仕事をしても、その人の声が聞こえると、一瞬にして意識がそちらの方へ飛んでいく。

『皆どどんな話をしているのかな?』

『どんな女の子がタイプなんだろ?』

『もう、気になつてている人とかいるのかな?』

とか、いろいろと考えてしまつ。

パソコンに数字を打ちながら、ふと、思い出し笑いをしてしまつた。

以前、彼が一人で楽しそうに、指でペンをくるくる回す（凄い高速回転だつた！）ところを見たり、ブラック珈琲を飲んでいる様に見せかけて、実はシューガーを何本もコツソリと入れてしているところを見てしまった事がある。

意外と子供っぽい所があるんだな、と思ったが、他の人達が知らない彼を知れて、ちょっと嬉しかつたりした。

彼の恋人になれたなら　　まだまだ知らない、彼の本当の姿を知る事が出来るかも知れない。

つて……恋人云々の前に、まず初めにやるべき事があつた。

彼を取り巻く美女軍団に気圧されて、話すどころかしつかりと目を合わせた事も無いのだ。

多分、彼は私の事なんか知らないと思つ。

パタリ……とパソコンの前に突っ伏す。

「ひつたり、彼に知り出されるんだがうつ……。」

彼は女性だけではなく、その明るく気さくな性格で男性にも人気があった。

仕事中は別として、朝の朝礼前や休憩時間などは女性陣が彼の周りを陣取つており、帰りは帰りで、男性陣が彼を飲みに誘つたりして、一人でいる事はまず無い。

どんよりとしながらパソコンを叩いていると、あっちゃんが「ねえ、琴海」と声を掛けて来た。

何? と顔を横に向けると、あっちゃんが今度は真面目な顔をして私を見ていた。

「私は、琴海が誰と付き合おうと反対はしないよ」

「うん」

「ただ、彼がこの会社の中でかなり人気が高いという事を忘れないでね」

女の嫉妬は、怖いよ?

「……嫉妬」

「そう。自分より劣っている人間が、彼と付き合っているなんて知つたら……かなり陰険な方法で虐められるかもよ?」

「…………」

自分より劣る人間……つて、もしかし無くても私の事?

何気に酷い事を言われたような気がしないでもないが、私はあつちやんが言った事をよく考えてみる。

人とお付き合いをした事が無い私は、今までそういうった嫌がらせを受けた事が無い。

よく読む少女漫画や小説などでは 。

『学生編』

下駄箱に入れていた靴に画鋲が大量に入れてあつたり、靴自体が無くなつていていたりする。

ロッカーの中に入れていたジャージが、ボロボロになつていて机の上に「死ね。ブス！」と落書きされていたのもあつた。

そして、机の中に入っていた手紙を開こうとしたら、中にカツタ一の刃が仕込んであつて、指を切つて流血。

『OL編』

いきなりお茶組み係りに回されていたら、仕事のミスをなすり付けられて上司に怒られる。

狭い給湯室の中で、秘書系の綺麗な人達に囲まれながら「どんな手を使って彼を誑かしたのよ、この淫乱！」などと罵倒され、終いの果てには女性の皆さんから総スカンを食らう。

まだまだ沢山あるが、もややんと頭の中で再現されたモノに、顔面蒼白になる。

「怖っ！」

「そうよ、女の嫉妬は怖いのよ

それでも、告白するの？　と聞かれた私は、「うーん……と考えるも、「うん、告白してみる」と言った。

「だつて、告白したからといって、彼と付き合える駄でもないんだし」

気持ちだけ伝えられたらしいの、と黙り、あっちゃんは肩を竦めた。

「まあ、琴海がそれでいいと言つながら、反対しないよ」

頑張んなさいと言つてくれるあっちゃんに、私はうんと頷く。あっちゃんはそんな私を見て、ふふふと笑つてから、もう一度クロフォードさんに視線を向けた。

途端に、今までの真剣な表情がガラリと崩れ、むふふ……と笑う。

「でもさあ、アレクみたいに田嶋は温厚なタイプに限つて、本当はどうかもしれないわよね」

やないのだらうかと思えてくる。

嬉々として『俺様男』を語るあつちゃんに適当に相槌を打つてい
ると。

「それに、耳元であんな美声で囁かれたひ……堪らないわよね」

あつちゃんの言葉に、私は溜息をつく。

彼があつちゃんが言うような『S』な性格なら、もしも付き合え
たとしても長くは続かないかもしない。

だって、私は皆が言つよつて、好きになつた人に酷い事を言われ
て、嬉しいと思えないし。

まあ、苛めは苛めでも、愛情がある苛めなのだらうが……私は好
きになつた人には優しい言葉を掛けて貰いたいし、優しく接して欲
しい。

普通は、そう思つものじやないのだらうか？

しかし、あつちゃんが言つては、「長く付き合つていれば、優し
さだけじゃ足りなくなる」のだそつだ。
新しい刺激を求めるものらしい。

そういうものなのかな？

と思つてみると、「京野、ちよつと……」と声を掛けられた。
顔を上げて呼ばれた方向へ顔を向けると、部長が手を振つて私を
呼んでいた。

「はい、今行きます！」　「ごめん、あつちゃん。ちよつと行つて
来るね」

「はいよ」

私はあつちゃん『S』を語つと、今までパソコンに打つていた内容
を上書きしてから、部長の元へ歩いて行つた。

部長の所に「はい、何でしょ?」と行けば、細かい文字がビッシリと書かれたメモ用紙を渡された。

何だらうこれ? とメモ用紙に視線を落としていると、

「ここに書いてあるモノを、資料室から持ってきて欲しいんだ」

部長は「コツと笑つてそう言った。

「ええーっと……これを、全部……ですか?」

「うん。悪いんだけど、今日中にお願い出来るかな? 明日の午後の会議に、急に使う事になつてしまつてね」

今日中に資料の中身に目を通しておきたいんだ、と言う部長。
「あの、こんなに数が多いと、探すのに少し時間が掛かってしまいますが」

だつて、全く別の階の資料室に置いているものまで、ここに書かれているのだ。

「京野さん一人に頼むんだから、それは仕方がないよ。今日中に私の元に届けてくれればいいから」

大変だと思うけど、やってくれるかな? と部長に言われた私。

もちろん、「嫌です」なんて言えるはずもなく……。

「分かりました」
「宜しく頼むよ」

「はい。それでは失礼します」

私は溜息を吐きたい気持ちをグッと堪えて、部長から資料室の鍵を預かると、自分の席へ戻った。

椅子に座つて漸く「はふうーっ」と息を出すと、あつちやんに「どうしたの?」と聞かれた。

一旦パソコンの電源を落とし、あつちやんにメモの中身を見せながら説明してあげたら、「うわあ~、『愁傷様』と言われた。

「……それじゃ、行つてきます」

「ガンバツ!」

その言葉に頷きながら私は席を立つ。
そして、メモに書かれている資料を取りに行くべく、歩き出すのであった。

「う、うーつ。お・も・いっ!」

頼まれモノを探して早2時間が過ぎた。

私は、分厚いバインダーが何冊も入ったダンボールを両手でガツチリ持ちながら、えつちらほっちら階段を上つていた。

エレベーターを使えば早いのだが、今日はエレベーターの安全点検日の為使えない。

なんてツイてない日のよつ!

鼻息荒く階段を上る私。

今は誰にも会いたくないわ
と思つてゐると、漸く目的の階にまで辿り着いた。

「ぐはあーつ……腰が痛い」

一旦ダンボールを足元に置き、腰をトントン叩く。

背筋を伸ばしてから、胸元のポケットに入れていたメモを取り出す。

「ええーっと、次はこの階の第一資料室ね」

メモをもう一度胸ポケットに入れると、「ふんぬつ！」と掛け声を掛けて重いダンボールを持ち上げる。

がに股になりつつ、長い廊下を歩き続ける。こんな姿、絶対他人には見られたくない。

せえーつ、はあーつ、と言いながら5分ほど歩いていると、プレートに『第一資料室』と書かれた部屋のドアが見えて来た。

「じつ、ここだわ！」

私は扉の前に立つと、周りに誰もいない事をもう一度確認してから、

ダンッ！

ダンボールを思いつきリドアにくつ付けた。

それから右足を上げてドアに膝をくつ付けると、ダンボールの底を上げた足の上に置いて、ずり落ちない様にした。

私は自分の胸と足とドアを使ってダンボールを落ちない様に固定すると、右手だけ離してスカートのポケットに入れていた鍵の束を取りろうとした。

「よつ、ほつ、はつ……取れたあ！」

ポケットの入り口で引っ掛けっていた鍵を取るのに、四苦八苦していたが、何とか取れた。

私はそのままの体勢で右手だけを動かし、鍵を開けようとしたのだが。

ガチャツ。

「え？」

突然ドアノブが回ったかと思つたら、ドアが内側に開いた。
思いつきり前のめりになつてドアに体重を掛けていたので、当然
。

「うひやああ～！？」

私は右足を上げた体勢のまま、資料室の中へ倒れ込んだ。

急に内側に開いたドア。
ドアに足を掛けていた私は、そのままの体勢で室内に倒れ込む。
片手と片足で支えていたダンボールは床に落ち、ファイルがバラ
バラと散らばる音がした。

「起きやあああ！？」

倒れる！ と思った私はギュッと畳を瞑りながらも、急いで上げ
ていた足を地に下ろした。

「い、い……っ」

すると、右足が何か硬いようで柔らかいモノを踏む感触がした。
パンプスの少し太いヒールの部分で何かを、ぐにゅーっと踏んだ
らしい。

ん？ 今なんか頭上から何か聞こえたような？

と思つて畳を開ける前に、体がスッポリと何か温かいモノに包ま
れた。

「ほえ？」

何が起きたんだろう」と畳を開けて顔を上げると、そこには

痛みを堪える様にして顔を顰める、クロフォードさんの顔が直ぐ
畳の前にあった。

余りにも近くにある整った顔に、ピキンッと固まる。

何？ 何が起きているの？？

今まで近付きたくても近付けなかつた人が、直ぐ目の前に！ と
いつ思つてもみなかつた状況にアワアワしていると、彼が「うぐう
……っ」と呻いた。

その呻き声にハツと我にかえる。

そろりと、見惚れる様な綺麗な顔から視線を下に向けていくと
まず、私の両手は彼の胸に添えられるようにして置いてあり、そ
れよりも下に視線を落とせば、私の腰周りに彼の腕が回されていた。
ビクビクしながら、視線を更に下 足元の方へと向けると……。
クロフォードさんの足 黒い靴が、私のパンプスのヒールに押
しつぶされ、グニャリと変形していた。

ひいいいいいいっ！？

さあーっと顔から血の気が引いた。

だつて、今の私は少し前屈みでクロフォードさんに寄り掛かつて
いるので、彼の左足の先に私の全体重が乗つてているのだ。

何度か満員電車の中で足を踏まれた経験をした事があるが、あの
時の激痛は涙が出るかと思つたほどだ。

「すすす、すみませんっ！」

急いで彼の足から自分の足を退けようと、身体を離そうとしたの
だが……何故か、クロフォードさんは、離れようとする私を自分の
元に引き寄せた。

体が更に密着する。

頬が上質なスーツの生地に当たり、彼が付けていたクロトンの香りがフワリと香る。

腰に回されていた腕は、苦しいほどに私を締め付けた。

何が……起きているの？

呆然としていると、クロフォードさんがフッと息を吐いた。吐息が旋毛に当たり、体がピクッと反応する。

彼の胸元から頬を離し、ゆっくりと顔を上げると……。

白い肌が薄くピンク色に色付き、少し長い前髪の隙間から見える、綺麗なターコイズブルーの瞳は熱を持ったように潤んでいた。

そして。

まるで、愛しい恋人を見詰める様な表情で、私を見下ろしていた。

あまりにも色っぽいその表情に、心臓の鼓動が早くなる。

男の人にはそんな表情を向けられた事がない私は、この状況をどう対処したらいいのか分からなかった。

暫く2人で無言で見詰め合っていると、彼はゆっくりと瞳を閉じ、艶やかな溜息を落としてこう言った。

「はああ……気持ちいい。……ねえ、もっと……強く踏んで？」

もつと……強く踏んで。

今のは幻聴だらうか、と思いつつ、はふうへつと艶やかな溜息をつく彼の顔を見上げる。

田に入つて来たのは、ターコイズブルーの瞳を隠す、髪の色と同じプラチナシルバーの睫毛だつた。

うわあー、凄く長あーい！ 羨ましいなあ……、とか思いながら見続けていると。

クロフォードさんの目がパチリと開いた。

あつ、目が合つた。

「…………」

「…………」

暫し、2人で見詰め合つ。

よく見ると、彼の目には今まで私を見詰めていた様なもつたものがキレイに消え去つていた。

そりやもう、キレイさっぱりと。

「あのう……クロフォードさん？」

「…………あつ」

クロフォードさんは田をパチクリと瞬かせると、今自分が何をしたのか思い出したのであつ。

サーーツと顔が青くなつた。

ピンク色の肌から白い肌に戻り、次に青くなつたのをポカーンと眺めていると。

「うおっ！？ あの、そ、の……」「、」「めん……つて、うわあああ！？」

クロフォードさんは驚いた声を発すると、私の腰からパッと腕を外し、慌てながら離れようとしたのだが。

自分の足が私に踏まれている事を、彼は忘れていた。

私は足を踏まれた状態で、上体だけが後方に傾いて行く。それはもう、スローモーションのようにゆっくりと。

うわわわわ！？ と言しながら、腕をグルグル回して何とか体勢を整えようとするも どう見ても、持ち直すのは無理な状態にまでなつていた。

危ないっ！

私はそんな彼を助けようと手を伸ばしたのだが……。

彼が倒れる寸前に、足の上に乗せていた右足を、ひょいと上に上げてしまった。

踏んでいた足の支えが無くなつた結果、彼の奮闘も虚しく、勢いよく後ろに倒れた。しかも、倒れる途中に近くにあつた机の角に頭

をぶつけていた。

右足を軽く上げ、手を伸ばした状態で暫し固まる私。助けようとしたのに、なぜか足が勝手に上がっていた。多分、巻き込まれて一緒になつて倒れるのを、無意識に避けた結果であろう。

私つて、意外にも薄情？

そんな事を考えていたのだが、床で頭を抱えて悶えているクロフオードさんを見て、我にかかる。

「だ、大丈夫ですか！？」

慌てて駆け寄り、彼の横にしゃがんでオロオロと顔を覗く。机の角にぶつけて相当痛かったのか、クロフオードさんはギュッと目を閉じて「う、ううーっ」と唸っていた。

ガソッ！ と凄い音が聞こえたから、そりや痛いだらうとは思うが、ぶつけた場所が場所なので、私は「気分が悪かったりしませんか？」と声を掛けながら、彼の後頭部にそっと手を当ててみた。そこには 。

大きなたんごぶが、やあ！ と顔を覗かせていた。

あまりの大きさに、ぎょっと目を見開き、頭から手を離そうとしたのだが、彼の手がそれを阻んだ。驚きながら彼の方に目を向けると、

「んん、あつ……触るの、止めない、で……」

私の手首を掴みながら、トロン、とした田で私を見上げてそう言った。

「え？」

「…………うん？…………あつ…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「あ、あのあ～クロフオードさん？」

「な、なんだい？」

思い切って声を掛けると、心なしか、彼の表情は引き攣っている様に見える。

ドキドキしながら、私は思っていた事を聞いてみる。

「あの、クロフオードさんって……痛いのが好き、なんですか？」

「え？」

「あ、違っていたら御免なさい！…………その、先程足を踏んでいた時も『もつと踏んで』と言われていたので、そつなのかなあ～？と、思いました」

最後の方をもうじきしながら言いつづけると、突然クロフオードさんが笑い出した。

急に笑い出した彼に、もしかして打ち所が悪かった？ と驚いていると。

私の手首を掴みながら、ゆっくりと起き上がる。

クロフオードさんは起き上ると、クスクス笑いながら私の顔を覗き込む。

「ねえ、こんな俺を見て……引いたりしないの？」

そう聞いてきたクロフォードさんの顔は、笑っていたが……瞳は、何かを恐れている様に揺れていた。

「いえ、別に、引いたりはしませんけど……そのおへ、ちょっと驚きました」

「ちょっと？」

首を傾げ、きょとんとした顔で聞いてくる彼の顔は、意外にも幼く見えた。

そんなレアな表情を見れて、少し嬉しくなる。

ホントは、ちょっとどういるか、かなり驚いたんだけど……それは言わなくてもいいだね！」

そんな事を思つていると、クロフォードさんがポツポツと話しだした。

「俺は、外見がこんなからいつも周りに女がいても……女を選ぶにも、選り取り見取り状態だったんだ。……だから、と言つ訳でもないんだけど、13歳から今の歳になるまで、彼女がいなかつた事なんて無くて……」

それは何處ですか？　と突つ込みたくなるが、彼の話は続く。

「でも、何故か付き合つ彼女のほとんどが、俺にSadism……加虐性的な事を求めて来るんだ」

その言葉に、私は「ああ、そつ言えれば……」とあっけらんが言つていた事を思い出す。

「クロフォードさんの声で苛められたい、と畜生女性が多いって聞きましたね」

「なんだよ。普段気の強い女性に限つてその傾向が強くてね。ベッドの中で俺が言葉責めするだけで、蕩けそうな表情をするんだ

けど……俺はそんな彼女の顔を見ても、満たされないんだ

「…………はあ」

「どちらかと言えば、思いつ切り冷めた目で見られながら、耳元で囁かれる様に言葉で責めて欲しいぐらいなのにある

「…………」

手首を掴まれたまま、急に他人のベッド事情を聞かされても、私は何て言つたらいいのか分かりません。しかも、何気に凄い事を言つてしまふん?

「あの、つかぬ事をお聞きしますが……クロフォードさんは、『U…………ではないんですか?』

思つた事を聞けば、彼は瞬きしてから、「いいえ」と、首と手を振つてこいつを言った。

「俺は、Masochist…………つまり、『M』なんだ。それも、『A』が付くほどのも」

何か吹つ切れた様な顔をして、『ドM』宣言をしたクロフォードさんは、
「でも、演技としてなら、『S』にもなれるけどね」と、爽やかな顔をしてそいつを言った。

ギシギシいう身体を引きずるようにして、会社から帰ってきた私は漸く辿り着いた築35年の、ちょっとボロッちいアパート。玄関の鍵を開け、誰もいない部屋に向かって「ただいま～」と言いながらパンプスを脱ぎ捨て、家の中に入る。

電気のスイッチを入れると、暗い部屋がぱッと明るくなつた。女の一人暮らしにしては少し広い、2LDKの部屋。大家のおばあさんが、私のおばあちゃんと知り合いの為、格安価格で借りてゐる。

私はコートのボタンを片手で外しながら、鞄とコンビニの袋を机の上に置き、もう片手で脱いだコートをハンガーに掛け、それからパソコンの電源を入れて、スーツからゆつたりとした室内着に着替えた。

ヘアバンドで前髪を上げると、私はそのまま台所に直行する。クレンジングで化粧を洗い落とてスッピンになると、顔についている水分をタオルで優しく押さえて拭き取る。

「ふうー、サッパリした」

コットンに付けた化粧水を肌にポンポンと叩きつつ、冷蔵庫の中にあるミネラルウォーターを取り出して一気に飲み干した。

グビ、グビ、グビ、グビッ…………ふつはあ～！

「げふつ」

誰もいない女の子の1人部屋。ゲップも普通に出てしまつ。まあ、人がいるときはしないので、悪しからず。

私は新しく取り出したミネラルウォーターを手に持ちながら、パソコンの前にドカリと座る。

「さ、て、とおー。先ずは何を調べましょうかね？」

私は近くのコンビニから買って来たおにぎりを頬張りながら、インターネットに繋ぐ。

一瞬悩んでから、私は『SM』のサイトを検索してみた。

10分後。

私は、パソコンの画面を眺めながら魂が抜けそうになつた。
SMと言うものには、ある程度の知識があった。……と、思つていた。

今まで。

しかし、私のちっぽけな知識は、今、粉々に砕け散つた。
私は静かにパソコンの電源を落とす。

「……SMって、鞭や蠅燭や洗濯ばさみを使うだけじゃないのね」
人差し指で胸元をグイッと引っ張り、自分の胸を見た。

私は先程見た画面の映像を思い出しながら、もしも“アレ”を自分の胸にしたらと考えてみる。

暫しの時間想像。

「いいやあー！ 痛い！ 痛過ぎるうー！」

両腕で自分の胸を庇う様にして身震いする。

私が見たSMサイトには。

女人の人の胸の先っぽに、マチ針みたいなものが3本も（ここ強調

！）、ぶつすり刺されている写真が載せられていたのだ！

見ているだけで痛い。

あんな事をされて、ホントに気持ちいいのだろうか……？

私には分からぬ世界だわ！

うひいーっと意味不明な声を発しながら一人で悶えていたが、はた、とある事に気付く。

そうそう。分からぬのは、何もSM世界だけではなかつた。

あの『アレク・クロフォード』と言つ人間も、私にとつては訳の分からぬ人間であつた。

私はおにぎりを食べながら、資料室での事を振り返る。
あの後。

ドM宣言をしたクロフォードさんを呆けた顔をして眺めていた私であったが、床に散らばるファイルを目にして私は、自分が何を以此處に来たのか漸く思い出した。

掴まっていた腕を振り払うようにして立ち上がり、散らばったファイルを急いで拾い集め、それをダンボールの中に入れ直す。

途中、クロフォードさんも手伝ってくれたので、彼にお礼を言いつつ、この資料室に置いてあるファイルも探し出して、ダンボールに入れる。

「あの、手伝って頂き有り難う御座います。助かりました」

私はペコリと頭を下げてから、ダンボールを抱えて部屋から出て行こうとしたのだが、

「ねえ、琴海ちゃん。俺達、付き合わない？」

ドアの前に立ち塞がり、ヒョイと私の手の中からダンボールを取り上げたクロフォードさんが、そんな事を言った。

どうして私の名前を？とか、あんなに重いダンボールを軽々と持ち上げるなんて、やっぱり男なのねとか、そんな事を思つていたのだが、口に出した言葉と言えば。

「て、丁重にお断り致します」

で、あつた。

人生初の告白であるが、それを速攻で断る私。

数時間前の私であれば、舞い上がつて即OKしていたと思つ。何せ、今の今まで自分から告白しようとしていた相手なのだから。しかし、先程から彼の知られざる本性を見たり聞いたりしていると、『これは私の手には負えない人』だと気付いたのだ。

クロフォードさんには、私の様な凡庸な人間ではなく、SMで言えば『女王様』の様な人が必要なのだと思った。

なのに……。

なにゆえ私を『指名でー?』

もしかして、私をからかっているのかしらと思いながら彼を見上げると、そこには、真剣な顔をしたクロフォードさんがいた。彼の瞳には、また、あの甘く蕩けそうな熱がともつっていた。

「……どうして駄目なの?」

「ええっと……それは、それは……」

「それは?」

ダンボールを持ったまま距離を縮めてくる彼に、私はふうつきやうになりながら後ずさる。

驚いて何も言えない私に、クロフォードさんがふつと笑つた。

「ねえ……付き合おうよ、琴海ちゃん」
身を屈め、私の耳元で囁く甘い声。

ゾクゾクした感覚が、身体中を駆け巡る。

身を竦めて下がれば、私が離れた分の距離を更に詰められ、彼の

整った綺麗な顔が間近に迫っていた。

背中に、資料棚の冷たい鉄の塊が触れる。後ろはどうやら行き止まりらしい。

驚いて目を大きく見開けば　　彼は顔を少し傾け、ターコイズブルーの瞳を閉じて唇を寄せて来た。

「琴海ちゃん……」

彼の熱を含む吐息が、私の唇に掛かる。

キス……される。

キュッと目を閉じた私は　　。

パンプスの尖った先で、彼の弁慶の泣き所（向いづね）を思いつつつきり蹴り付けた。

「うがあ！？」

ガスツ！　という鈍い音と共に、ピタリと動きを止めたクロフォードちゃん。

まさか、蹴り付けられるとは思いもしなかったのだろう。中腰のまま固まっている。

私は、緩んだ彼の腕の中からダンボールを奪回すると、蟹も顔負けの素早い横歩きで彼の横を通り過ぎる。

火事場の馬鹿力とはこの事であろうか。

私は重いダンボールを持ったまま、片手でドアを開け放つと、それから両手でダンボールを持ち直して素早く廊下に躍り出た。

クルリと資料室に向き直り、蹲つて足を押さえているクロフォードさんに声を掛ける。

「私、貴方とは付き合えません。……価値観が違い過ぎるので、上

手くやつていけないと思つんです」「

それでは、と言つてからペコリと頭を下げて、両手が塞がついた為、足でドアを閉めた。

キイ……パタン。

ドアが閉まる乾いた音が、静かな廊下にいやに響く。

私はすうっと深呼吸すると、急いでその場から離れるべく、持てる力を振り絞つて長い廊下を歩いて行つた。

その後は、残りの資料を全て集めて部長の元に届け、むぐんだ足を揉みつつ、就業時間まで頑張つてお仕事をした。

暫く経つてからフロアに戻つて来たクロフォードさんは、涼しい顔をしながら仕事をしていた。

彼が、何度も部屋の中央から私に向けて、熱い視線を向けていたのは分かつていた。が……あえて無視していた。

触らぬ神に祟りなし、である。

ミネラルウォーターをゴクゴクと飲みながら、はふうーと息をつく。

「本氣で彼の事を好きになる前に分かつて……良かった」

もしもクロフォードさんの本性を知らずに告白していたら、えらい事になつていた。

私の恋愛に対する淡い夢が、壊されてしまつ！

『M』だからイヤつて言つわけじやあないけれど、彼は私が理想とする彼氏ではない事だけは、確かである。

彼じやなくても、他にカッコよくて彼女無しの優しい男性はいるはずだ。……多分。

その人に私は告白をしよう。うん、それがいい。

クロフォードさんの事は、も'つ忘れよ。

と、そんな事を思つていた私であるが……。

世の中自分の思い通りに物事が進まない事を、翌日学ぶ事になる。

公園のベンチに座り、私は頑垂れていた。

快晴の青空なのに反して、私の周りにはドロドロとした重い空気が渦巻いている。

そんな私の周りを、雀がチュンチュンと鳴きながら飛び回っていた。

いつもなら可愛いと思つ鳴き声も、今は疎ましい。

雀から視線を外し、少し離れた場所にある自動販売機に目を向けると、公園の噴水で子供達を遊ばせているママさん達の、熱うまい視線を集めているクロフォードさんがいた。

「う、うーつ。何でこんな事に……」

頭を抱えながら悶えていると、両手に小さなペットボトルを一つずつ持つたクロフォードさんが、こちらに戻つて来るのが見えた。どうやら、お気に召した飲み物が買えたらしく。

キラキラと輝く笑顔で私に近付くクロフォードさんを、どんよりとした表情で迎える私は、本日何度も分からぬ溜息を深々とついていた。

今から数時間前。

「京野さん、今日からクロフォード君の下に就いて働いてくれ」朝の朝礼が終わった後に部長に手招きされて、「何でしょ?」と伺えば、そんな事を言われた。

はい? と首を傾げると、部長は自分の隣にいるクロフォードさんを指差して、「今日から、彼の下に就いて働いてね」と言つてくれた。

いきなりなんでそんな事に！？

驚愕しながらチラリと彼に視線を向ければ、爽やかスマイルをも
らってしまった。

その瞬間。

鋭い視線がグサグサグサグサツ！！と私の背中に突き刺さる。

殺氣の籠もつた鋭い視線を生まれて初めて向けられた私は、「ク
リツ」と息を呑みながら、そーっと後ろを振り向き パツと前に向
き直る。

私の後ろでは、彼の周りをいつも取り囲んでいる美女軍団が、ギ
ラギラした目で私の事を睨んでいた。

「、怖いよお～！」

ビクつきながら、部長に私以外の人には頼めないか聞いてみるも、
別に難しい仕事でもないんだよ？」と言われた。

「クロフォードが必要とする書類を集めたり、外回りの時には、荷
物を持って一緒に回ってくれればいいだけだよ」

「あのおー。お言葉ですが……それでしたら、私ではなくても、他
の方でもいいのでは？」

私がそう言うと、背中に刺さる視線が少しだけ緩くなる。

その事にホッとしたのも束の間、「でも、これはクロフォードた
つての願いでね……」と言う部長の言葉に、緩んだ視線が先程より
も更に鋭さが増した様な気がした。

ひいいいいいいっ！？

「ぶ、部長……あ、の……」

「それに、昨日クロフォードが探していたモノを、一緒に探して見付けてあげたそうじやないか。その事もあって、是非に、と言う事らしいよ?」

「そうだったよな? とクロフォードさんに確認する部長に、彼は「はい」と頷いた。

部長を見て頷いたクロフォードさんは、私に視線を合わせると、「昨日は、大変お世話になりました」と言って笑った。

「京野さんの人となりを見て、私の仕事を手伝って頂くなら、この方だと思いました」

「え、ええ! ?」

「一体何の話ですか! ?

私は彼の言葉に、目を白黒させる。

お世話になつたつて? 私の人となりを見たつて……何の事! ?

そんな事をグルグル頭の中で考えていたのだが、ハタと気付く。きしたり、蔑む事などをしなかつた。

『お世話になる』 彼の足を踏んだり、蹴ったり、頭に出来たタンコブを触つたりして、彼に快感を与えた事。
『私の人となり』 痛みの快感に酔いしれる彼を見ても、ドン引きしたり、蔑む事などをしなかつた。

私は頭を抱えたくなった。
心の中で、

あ、あれはお世話になつたつて言わないわよーー!

と叫んでいたが、現実には口をぱくつかせていただけであった。

そんな私を見たクロフォードさんは私に一歩近付き。

「これからよろしくね、琴海ちゃん」

につこうと笑つてそう言つた。

この時からだ。

この時から、私はこの爽やかスマイルが怖いと想つようになった。

「はい、琴海ちゃん。ミルクティーでよかったです?」

丁度回想が終わつた頃に、クロフォードさんが戻つて來た。

「あ、はい。……有り難うござります」

良く冷えたペッドボトルを受け取り、頭を下げた。

顔を上げれば、二三つと素敵に笑うクロフォードさんのお顔が間近にある。

スイッと顔を横に向けて、その微笑から目を逸らす。

部長の命令で彼と共に働く事になつた後の美女軍団の反応が、今頭の中で蘇つて來た。

「急な事で悪いんだけど、これから梶原商事に行くから付いて来て」とクロフォードさんに言われた時の、あの美女軍団の視線！

私の体は、この鋭い視線で穴が開くのでは？

と思えるほどであつたが……この麗しい顔を見れば、皆様方の反応も頷ける。

会社に帰つたら、またあの鋭い視線を浴びる事になるのか……

と溜息を付いてから、ふと、彼は何を買ったのだろうと手に持つているペットボトルを見れば、手に持つ缶コーヒーの、ロゴの下に小さな文字で『無糖、ブラックコーヒー』と書かれているのが見えた。

どうやら彼は、外に出てもブラックコーヒーを買っているらしい。

「コーヒーを一口飲んで『美味しいね』と言つてはいるが、口に入れた瞬間、眉間にピクッと動いたのを私は見逃さなかった。

苦手なものを、何でそんなに無理して飲むのかな？

「……あの、クロフォードさん」

「何？」琴海ちゃん

「ブラックコーヒーが苦手なら、無理して飲まない方がいいんじゃないですか？」

「ぐうほっ！？」

急に咽たクロフォードさん。コーヒーが器官に入った模様。

ハンカチを手渡して背中を擦つていると、咳が収まったのか、涙目の中のクロフォードさんが私を見上げる。

「……琴海ちゃん……どう、して……げほっ、その事を……？」

「……あの、以前クロフォードさんが、『ソリお砂糖を入れているのを見た事があつて』

私がそう言つと、「うわあー、見られちゃつてたのか」と俯き、両手で顔を覆つた。よく見れば、耳が真つ赤である。

どうやら、無理してブラックコーヒーを飲んでいたのを知られていた事が、相当恥ずかしかつたらしい。

暫し、私達の間に無言の時間が流れる。

私は、ふう～っと息を吐き、まだ飲んでいないミルクティーをクロフォードさんに差し出す。

「これ、良かつたら口直しこどひだ」

「……え？」

「口の中、まだ苦いでしょ？」

「ああ、うん。……ありがとう」

素直にお礼を言う彼の顔に、ドキッと心臓が跳ねた。

そう、クロフォードさんの顔は、私好みのカッコいい顔なのだ。

そんな風に笑い掛けられたら、グラついてしまう。

いけないわ、琴海！ この人は、私とは別次元に生きている人なのよ！！

そんな事を思いながら頬を叩いて正気に戻ると、私は書類が入つて重くなつたカバンの肩ひもを肩に掛け、ベンチから勢いよく腰を上る。

「休憩は終わり！ わっ、そろそろ行きましょ 」

「おぶっ」

身体の向きを変えようとしたら、変な音が聞こえた。
え？ と思つて斜め下に視線を落とすと。

クロフォードさんの頬に、カバンの底の角がめり込んでいた。

「す……すみませんでした」

赤く腫れた頬を摩つている上司に頭を下げる。

「もう大丈夫だから、気にしないでくれ」

「そういう訳には……」

鞄を両腕で抱えながら、俯くようにして項垂れる。

だつて、上司の顔に鞄の角をメリ込ませてしまつたんだもん。初日からこんな失態をしてしまい、顔を上げられなかつた。

そんな、しょぼくれる私の頭上から苦笑が聞こえてきて 頭に大きくて暖かい手が、ポンッと載せられる。

そお～っと顔を上げれば、少しバツの悪い顔をしたクロフォードさんがそこにいた。

「いや、ホント、琴海ちゃんには感謝しているんだ」

人の頭を撫でながら、クロフォードさんは肩を竦める。

「まさか、あんな人が大勢いる所で『M』を曝け出す訳にはいかないからね」

「…………」

そう。鞄の角が頬にめり込んだ後、ちょっと“おかしくなつた”クロフォードさんを、誰も居ないベンチの方へと引摺るようにして連れ込み、時間を掛けて正気に戻した私。

え？ どうやって彼を正気に戻したのかつて？
それは……。

企業秘密です。

と、いうか……皆様の『想像にお任せいたします。はい。

「そうこうの訳で、」れ以上謝罪は必要なこと

彼はそう言つと、両腕を上に伸ばして「うへん」と伸びをした。

「せじと……それじゃあ、それそろ行きますか」

「あ、はい」

ベンチから立ち上がったクロフョードさん^{ハジケ}、私も立ち上がる。

それから、これから行く梶原商事の事を歩きながら説明しようとしたら。

「ああ、別にそんな事はこよ

と、言いながら歩き出す。

「え？ あの、いいとは……どういう意味で……？」

「ん？ ああ、今日は梶原商事さんには行かないから、いいよつていう意味だよ」

「は？」

「いや、普段会社にいると、周りが騒がしくて琴海ひやんとひみつくじと話せないじやないか

「はあ、ねうです……か？」

「だから、ゆづくじと琴海ひやんと過ぐ」せる時間が欲しくて、梶原商事に行くつていう事にしておこしたんだ

クロフォードさんはそう言つと、鼻歌を歌しながら田舎地からうんうん逆方向へ歩いて行く。

慌てて追い掛けて行けば、クルリと振り向いたクロフョードさんが、私の右手を取つて、そのまま歩き出した。

「ちよ、あの、手……」

「それよりも、琴海ひやんケーキとか好き？」

「へ？ ケーキ……ですか？」

「うん、うん。」から少し離れた場所にある『テコアリーネ』つ

て言つケーキ屋さんなんだけぞ」

奢るから行かない? といつ言葉に、一瞬、手を繋がれないと

いう事実も忘れ、ぐらりと私の心は揺れた。

だつて、そのケーキ屋さんは私が前々から気になつておいたお店で、常々入つてみたいと思っていた所だつた。

本心は、行きたかつた。美味しそうだし。奢りだし。

でも、今は仕事中なんだから! と頭を振つて、甘い匂いの誘惑からなんとか抜け出し、「いや、食べません」と断つた。

そんな私を見たクロフォードさんは、ちょっと残念そうな顔をするも、直ぐに元の顔に戻り、「じゃあ、今噂の~」とか言って、梶原商事に向かう気配がない。

「あのお、クロフォードさん? 梶原商事には……」

「ここのだけの話、梶原商事さん」、今日行く予定は無かつたんだ」「ひとつ笑うクロフォードさん。

「だつて、梶原商事に行くところのま、琴海ちゃんどホールトをする為に付いた嘘だし」

「嘘?」

「はあ~。俺、こんなにゆつたりと週♪」すトートリ初めだよ」と言い、更に彼はいつ呟つた。

「今日は一日、琴海ひやんとゆづくと週♪」つたから、仕事は無しー」

はー? と驚く私に、クロフォードさんは更に「だから、ボードに『直帰』つて書いてきたんだ。 ああ、心配しないで? 琴海ちゃんの所にも『直帰』つて書いておいたから」と言つ。

「クロフォードさん！ そんな事したら駄目じゃないですか！ そんな事をしても、私、全然嬉しく有りません」

「え、 そうなのか？ 今までの彼女達なら、喜んだけどなあ……。」

それに、誰も俺達のを見てないんだよ？」

悪怯れる様子もなくそう言つた瞬間。

私の中で、 プチッと何かが切れる音がした。

会社の人達に仕事をしていると見せ掛け、外に出て遊ぶ。
それを、今までの彼女達の様に、私も喜ぶとでも本気で思つているらし。

とんでもないわ！

そんな、 彼女達と同類に思われた事に頭が来た。

それに、誰も見ていないと思つても、意外な時に、意外な場所で、誰かに見られる という事がある。

誰も見ていない時だからこそ、きちんとしなければならないと私は思う。

私の手を繋いでいたクロフォードさんの手を、私は振り払う様にして離すと、驚くクロフォードさんに「私、会社に帰ります」と言つて踵を返した。

ゆつくりとしたいのなら、1人でして下さい。私は、会社に帰つて仕事の続きをしますので！

1人で公園の出口に向かつて歩き出した私に、「」、琴海ちゃん！？「と慌てて後を追つてくるクロフォードさん。

クロフォードさんは「どうしたの？俺、何かした？」と聞いてくる。

したから、私は怒っているのよー。

眉間に皺を寄せ、黙々と公園の出口に向かって突き進む。その後ろを、クロフォードさんが少し困った顔をしながら歩いていた。

「ねー、琴海ちゃん

「…………」

「『めんね？でも、いつでもしなきゃ、琴海ちゃんといひくつ牒
る事も出来なかつたし』

「…………」

「琴海ちゃん、ホンドーめん。……許して？」

人の顔を覗く様にして、私に許しを請うクロフォードさん。

……美女軍団がこの光景を見たら、私、殺されるかもしれない。

「ねえ、何か喋つてよ」

「…………」

「あっ、ちょっと待つて、琴海ちゃん！」

私は Pruitt と顔を逸らして、更に歩く足を速める。

慌てて後を追うクロフォードさん。

何故私が怒っているのか、本当に分かつていないクロフォードさん振り向き、キッと睨み上げる。

「私は、仕事をする為に貴方の下につきました。決して、貴方の暇つぶしかなにかに付き合つ為ではありません……って、何笑つてるんですか」

「えっ、あ、いや……琴海ちゃんの怒った顔が、すいへ可愛いなあーと思つてね」

「うひつて、なでなでと頭を撫でられた。まるで小さな子供の様

そりやあ、190?のクロフォードさんにしたら、156?の私なんか子供の様に見えるかもしねいけど……。

「もう少し冷めた目で見てくれるなら……もつと嬉しいな？」
頬を上気させて私を見下ろしてくるクロフォードさんに。」

再度、私の中でチクリと何かが切れる音がした。

プリップリと怒る私の後を歩くクロフォードさんは、終始私の「」機嫌取りをする様に「琴海ちゃん、許して?」とか「ねえ、何か喋つて?」と声を掛けてくる。

なんなんでしょう、この居た堪れない気持は……？

私の心がチキンなのか？

今まで「琴海ちゃん、琴海ちゃん！」と、人の周りをうろつきながら『琴海ちゃん』を連呼していた人が、急に口を噤んで暗い顔をしながら私の後を歩いていくのを見ると、何故か私が苛めている様

な気分になる。

「...」
「...」
「...」
「...」
「...」
「...」
「...」
「...」
「...」
「...」

何時までも怒つて、無視し続けるのも、そろそろ止めようかと思つた時、急に後ろから溜息が聞こえてきた。

私の子供っぽい態度に……呆れられた？

慌てて後ろを振り向き、彼に誤ろうとして固まつた。

彼は右手で胸元を握り締め、はふりと豊かな息を吐き、つとりとした瞳で私を見詰めてこう言つた。

「…………放置プレイも、なかなかいいモノだね？」琴海ちゃん

言葉が出なことせ、いの事だらう。

私が悶々と悩んでいた時、どうやら彼は『無視』という『放置プレイ』に喜んでいたようである。

私は、ガックリと力が抜けた。

「え？ あれ？ どうしたの？ 琴海ちゃん」「いえ……何か、ちょっと疲れただけです」

そりへ、ちよつと疲れたの。

私のやる事なす事のすべてが、クロフォードさんを悦ばせる事に
繋がるらしい。

公園から出た私達は、クロフォードさんが受け持つて いる何件かの契約会社に出向いていた。

もちろん、その中には会社を出でくる為に口実に使つた『梶原商事』も入つて いる。

勤務時間は、仕事をするための時間なんですっ！ 遊ぶ為の時間じゃありませんん！！ と説教をして、渋る彼に仕事をさせたのだった。

「琴海ちゃん、お腹空かない？」

最後に行つた会社のロビーを出て、ふうーっと息を吐き出した時にそんな事を言われた。

携帯の時計を見れば、既に6時半を過ぎていた。

「あ、そういえば……」

例の美女軍団からの刺々しい視線に当たられ、お昼ご飯があまり喉を通らなくて半分以上残していた私は、言われてお腹に手を当てる。

「お腹、空きました」

今まであまり気にならなかつたのに、言われたら猛烈にお腹が空いてきた。

キーボードに、クロフォードさんが直帰と書いてくれたので、もうこのまま帰ろうかなと思つた時、隣を歩く彼に「ねえ、琴海ちゃん」と声を掛けられた。

「はい、何ですか？」

隣を歩く人が自分より凄く大きい為、首が痛くなるくらい見上げ

れば……」「一つと、笑顔全開で笑うクロフォードさんが」いついつつ
た。

「琴海ちゃん、これから一緒に夕食でも食べに行こうよ。」

そう言つと、私の手を取り何処かへと歩き出す。

「え？　あの、私は　」

「何が食べたい？　フレンチ？　イタリアン？」

「いえ、私は家で」

「あ、中華も捨てがたいよねえ」

「あ、あの！」

「んん？　何？　琴海ちゃん」

「えつと……せっかく誘つて頂いたのにすみませんが……疲れたの
で、私は家に帰つて一人で食べ　」

「家で？　それじゃあ、琴海ちゃんの手料理が食べられるつて事！？」

「いえ、そうじゃなくてですね……」

人の話を全く聞かないクロフォードさんに、頭が痛くなつてきた。

私は眉間を揉みながら、もう一度彼を見上げた。

「のですね？　クロフォードさん。私は家で一人でゆつくりご飯
を吃るのが好きなんです。それに……私は料理が不得意で、クロ
フォードさんが家に来ても期待する程のような料理をお出しするこ
とが出来ません」

遠まわしに、「貴方と食事をするつもりはありません」と言つた

つもりだったのだが……。

「あ、そうなの？ ジャああ、琴海ちゃん。俺の家に来て食べない？」

「は？」

「どうせ、私の気持ちばかりとも彼に向むかひなからたらしく。

「この見て、俺、料理得意なんだ。期待してくれてもいいよ。」

「いや、あの、だから私は帰ります」

「琴海ちゃん」

「は、はい」

これ以上クロフォードさんのペースに流されてなるものかと、繫いでいた手を離そうとした時。ピタリと歩みを止めたクロフォードさんが振り向く。

何を言われるのかと、緊張した面持ちで見上げる私に、真剣な表情で私を見下ろすクロフォードさんがゆっくりと口を開く。

「琴海ちゃんと、どうしても一緒に食事をしたいんだ。だから、少しの時間だけでもいいから……」

繫いた手を一度解かれたと呟いたら、自分の指に細長くて綺麗な指が絡めるように繫がられ。

「琴海ちゃんとのこれから的时间を……俺にちょうどいいっ！」

熱く掠れた声で名前を呼ばれ、甘くて、少し艶を含んだターコイズブルーの瞳に、目が釘付けになる。

絡められた指先から、体全体に熱が発生する。

多分、『これから的时间』 = 『『』飯を食べる时间』 の事を言つて
いるのだろうが……。

一瞬、プロポーズ？ って思つてしまつた。

言葉と態度が紛らわしい。

卑怯よつ！

バツと顔を下にむけて、私は心の中でそう呟んだ。
だつて、だつて……私にとつて、クロフォードさんの顔つて超
ストライクなんだもん！

そんな顔で見られたら……彼の本性を知つて居るのにグラついて
しまつううー！！！

琴海！ ここでグラつこちやダメよー！ と心中で自分に言い
聞かすも……気付けば、膝を屈めて私の顔を見詰めるクロフォード
さんに。

「いいよね？ 琴海ちゃん」

「…………はい……」

自分の励ましも虚しく、アッサリと「はい」と頷いていた私。
しかし、私はクロフォードさんのお部屋に行くことが決定した。

「琴海ちゃん、ここonsoフアーハでも座つて待つて！」

「あ、はい」

クロフォードさんの家に上ると、まず広いリビングに驚く。

床は木目調のフローリングで、ガラスのテーブルと黒革のソファーが置かれている部分にだけ白くてフカフカの絨毯が敷かれていて、大型のテレビとCDデッキ、それに、海外の小説などが置かれた本棚以外は何もなかった。

生活感がまるで感じられない部屋の中で、辺りを見回しながらポカンと立ち尽くしていると、

「うひやあ？」

右の掌に濡れた何かが押し付けられ、ビックリして後ろを振り向けば。

「ワン」

「…………黒ラブちゃん？」

尻尾をフリフリ揺らす、黒のラブラドール・レトリバーが私を見上げていた。

しゃがんで頭をナデナデすると、嬉しそうに目を細め、それからバタリと倒れて仰向けになつてお腹を出し、「お腹も撫でてえ～」と言つような目で私を見詰める。

その仕草が可愛く、笑いながらお腹を撫で上げれば、黒ラブちゃんはウットリと眼を閉じて尻尾を床に打ち付けていた。

「エルダーだけズルイな」

黒ラブちゃんのお腹を撫でていたら、不機嫌そうな顔をしたクロフォードさんが、台所から体を半分だけ出してこちらを見ていた。

私服に着替えたクロフォードさんは、今、夕食の準備中である。

「あの、このワンちゃんの名前ってエルダーって言うんですか？」

「そうだよ。って、『めん。家に来る前に犬がいる事を言うの忘れてた』

「ああ、大丈夫です。私、ワンちゃん大好きなので」

そう言ってから、「ね～？ エルダー君」ともう一度お腹を撫でれば、クロフォードさんは「……ズルイ」と恨めしそうに咳きなが

ら台所へ戻つて行つた。

その姿を見た私は、ちょっとぴりだけ緊張が和らいだ。

クロフォードさんの「料理が得意」と言ひ言葉は本当であつた。ガラス製のテーブルの上には、ほかほかと湯気を立てる美味しそうなおかずが、数種類置いてある。

手前から　だし巻き卵、肉じゃが、さばの味噌煮、筑前煮、ほうれん草のおひたし、大根の沢庵漬け、長ネギと油揚げが入った味噌汁……等々があつた。

アメリカ人だから、ハンバーグとかステーキとかが出てくるのかと思つていたら、純和食料理の品々に目が丸くなる。

「日本料理を作れるんですね、クロフォードさん」

「うん。あちらに日本人の友達がいて、そいつから色々教えてもらつたんだ」

クロフォードさんはそう言いながら、緑茶が入つた湯呑茶碗を私の前に置いた。

そして、水産系の会社に行つた時に貰つたという、イカの塩辛を冷蔵庫から出してきた。

「俺、この頃、イカの塩辛にハマつてるんだ

「……………ですか」

イケメンの外人さんが、イカの塩辛を食す……人の嗜好をとやかく言つつもりはないが、なんか不思議な光景だ。

「さつ、食べて食べて」と言うクロフォードさんに「いただきます」と言ってから、私は彼が作つてくれた料理を食べだした。

あまりの美味しさに顔が緩む。

私のその表情を見て、クロフォードさんはホッとしたような表情をした。

それ以降、私達はたわい無い話しなどをしたりして盛り上がりつ

いた。

そして、時間はあつとこつ間に過ぎていった。

「あつ、もつこんな時間なんですね」

「飯を食べ終わると、クロフオードさんの下供の時の話をお茶を飲みながら聞いていた。

楽しい一時というものは、本当にあつとこつ間に過ぎてしまつもので、ふと、時計に目をやれば、時刻はもう一時を過ぎていた。「すみません、こんな遅い時間までおじやましてしまつて」「私が頭を下げる」「いけない、こんな遅い時間まで引き止めてしまつて悪かった」と謝つてきた。

家にまで送つてくれると言つクロフオードさん、「の時間ならまだ終電に間に合つので大丈夫ですと首を振る。

「飯美味しかつたです。」馳走様でしたと頭を下げてから、「さて、帰りましょ」とバックを取ろうと手を伸ばしたら

「待つて、琴海ちゃん」

伸ばした手を、横から伸びて来た大きな手に突然掴まれた。

ビックリして顔を横に向ければ、苦しそうな表情をしたクロフオードちゃんがいた。

「クロフオードさん もやあつー?」

一体どうしたのかと彼に声を掛けよつとしたら、突然抱きしめられた。

「ななな、何!?

つきやあつ。と心の中で叫びながらもぞもぞと彼の腕の中で動くも、彼は離す気がないらしい。

私の肩と腰の辺りに、クロフォードさんの腕がガツシリと巻き付いていて離れない。

クロフォードさんの顔が私の首筋付近に置かれていて、柔らかなプラチナシルバーの髪が、私のうなじを擦る。

ぎゅううつと、痛いぐらいの力で抱きつかれ、「んう……」やあつ……苦しい……と言えば、少しだけ腕の力が弱まった。

急に何なのおー? と涙目になつていると、クロフォードさんがハアッと溜息をつく。

そして、私の体に回した腕を外さないまま、体だけを少し離して私の顔を覗くよろしくして見詰める。

「……琴海ちゃん。俺、君のことが好きなんだ」

そう言つと、肩に回していた腕を外し、そつと……私の右頬を大きな掌で包み込む。

「遊びとか、そう言うんじゃない

確かに、初めはそんな軽い気持ちで言つていたんだけどね、と苦笑する。

「俺の周りにいる女性つて、仕事中でも誘えれば喜んでついて来る人がほとんどでや……」琴海ちゃんのよつて、俺に向かつて真剣に怒つてくれる人つて……初めてで……」

そんな琴海ちゃんに惚れたんだ、と言われた。

間近にめちゃくちゃ好みな顔があつて、それに「惚れた」と言われた私の思考は停止する。

ポカーンと口を開ける私に、クロフォードさんは更に顔を近付け
る。

「……琴海ちゃんは、今、付き合っている彼氏とかいるの?」

ふるふると首を振る。

「じゃあ、誰か好きな人がいる?」

これも、首を振る。

「俺の事、嫌い?」

嫌いではないので首を振る。

「じゃあ、どちらかと言えば好きな方?」

まあ、嫌いではないから……と、コクリと頷く。

「俺が作った料理、美味しかった?」

うん。すっごく美味しかった。頷く。

「また食べたい?」

頷く。

「デザートも食べたい?」

大きく頷く。

「じゃあ、俺と付き合つて?」

大きく頷く。

ん?

頷いてから、あれ? と顔を上げれば、ぱああああつと、明るい表情をしたクロフォードさんが田に入った。

「あ……いえ、今のはまちが むきやつ!?」

「本当!? やつたあーーー!」

むぎゅうううつと、又しても抱き締められる。

「琴海ちゃん……俺、一生大事にするからー。」

クロフォードさんはそう言つと、私の顔を持ち上げ、その整つた

綺麗な顔を近付けてきた。

初めて自分の唇に触れる他人の感触に、体が硬直する。

恋愛初心者な私は、キスも初めてなわけで……。

「んっ！」

なのに。。

「琴海ちゃん……」

「んんん……ふあっ、ん……んむう」

私のファースト・キスは 濃ゆうい『ディープキス』であった。

「……ん……もう、やあ……」

小説や漫画などでは、ファースト・キスはイチゴ味とかレモン味とか、果物っぽい味が書かれているのがほとんどであったが。

「つっはあ……」

長く重なっていた唇が、漸く離れる。

私のファースト・キスは、だし巻き卵の甘い味であった。

長らくお待たせいたしました。

一度離れた唇も、直ぐに塞がれてしまった。

啄む様なキスが沢山落ちてくる。

たまに、頬や瞼、額にも柔らかな唇が触れるが、やつぱりココが一番いいといつよつに、直ぐに唇に戻ってきた。

「んん……ふうつ……」

キスなんて初めてだけど…………クロフォードさんつて、キスがとっても上手なんだと思う。

だって。

とっても気持ちイイんだもん。

最初のように、舌がうにょろんって入ってきた時なんか、「うひやああああああー!」と心の中で叫んでいたけど、今のように唇が軽く触れたり押し付けられたりするようなキスは、とっても気持ちイイ。

だけど、

「ふむう……ん、ん、ん、ン、ン」

長く塞がれ続けると、どこで息を吸つたらいいのか分からぬ。

息苦しくて、グググッと眉間に皺が寄つた時　　トントントンと、鼻先を叩かれた。

うつすらと目を開けたら、クロフォードさんが唇をくつつけたま

ま田を細め、もう一度鼻先を指でトントンと叩いた。

鼻で息を吸えと言いたいらしい。

私は言われるままに、スゥ～っと鼻から息を吸つたのだが　ハタと動きを止める。
もしかして……こや、もしかしなくても、このままの勢いで鼻から息を吐き出したら…………。

私の荒い鼻息が、クロフォードさんの顔に思いつ切り掛かってしまつのは？？？

そんなの嫌あ！！

首を振つて唇を離そと試みるも、大きな手が後頭部をガツチリ掴んでいる為、動くことが出来ない。

それならと、距離をとろつと腕を伸ばしたり背中を反らしてみると、もう片方の腕が私の腰にきつく巻き付いている為、離れることも出来ない。

「…………ふあ…………もっ、や、め…………ふむっ！？」

なんとか唇を離して、もう止めてと言おうとしたら　口を開けた隙間から舌を入れられてしまった。

いやあ、また来たあ！？

慣れない感触に涙目になつていると。

「ふぐぐ！？」

腰に回つていた腕が移動して、背中を撫でながら脇腹のラインを確かめるように撫でられる。

そして、そのままスルスルと胸の上にまでやつてきた。

ぎょっと田を見開くも、目の前にいる彼は眼を閉じていて、何を

考えているのか分からぬ。

いや、考えている事は、多分1つしかないが……。
服の上から、胸を持ち上げるようにして揉まれ。

「んん~っ!~?」

人生最大最高の危機を感じ取った私は、この状況からなんとか逃
れようと、周辺にあつた物を手当たり次第に掴み、

それで彼の頭を思いつきり殴つた。

「ぐぼつ!~?」

「はつふう~っ」

彼が離れた隙に、肺に溜まつた一酸化炭素を素早く吐き出す。

胸に手を置き、荒くなつた呼吸が落ち着くのを待つ。

暫くすると呼吸も落ち着いてきて、自分が手に持つてゐる物に漸
く気付いた。

右手に持つてゐた物は、厚さが10cm以上ありそつと厚い本
であつた。

手に持つ本は、硬い表紙のハードカバーで……その本の角が少
し凹んでゐる。

「…………」

こんなモノで彼を殴つてしまつたのかと、固まる。
ヘタをしたら、怪我だけじゃ済まされない事になつていたかもし
れない。

手元の本から視線を外し、直ぐ側にいるクロフォードさんに目を

向けると

彼は私に背を向けて、頭と口元を手で抑えて蹲っていた。

「ディープキスの最中に頭を殴られた衝撃で舌を噛んでしまったらしく……頭の他に、お口の中も大変なことになつているらしい。

「あー……あの、クロフォードさん？」

やり過ぎたと思った私は、彼の肩を叩きながら呼びかけてみる。呻き声を上げながら、ふるふる震えるクロフォードさんを見て、やり過ぎてしまつたと後悔した。

しかし、私がそんな事を考えていたのに、彼は「あふうう……い」 と呟いたかと思えば、クルリと向き直つて 。

私の腰に抱きついてきた。

「ひやっ！？」

腰に両腕を巻き付けられ、胸元に彼の顔が押し付けられた。
中腰になつたまま、胸元にあるプラチナシルバーの頭を驚愕の瞳で見詰める。

彼は私に顔を押し付け頬擦りをすると、潤んだ瞳で私を見上げてきた。

「やつぱり、琴海ちゃんは俺が思つた通りの人だ」

そう言つとい、ウツトリとした顔でこう言つた。

「もつともつと、俺を痛めつけて？ そして、精神的苦痛を齎すよ
うな言葉で罵つて、冷めた目で汚い物でも見るかのよつて見詰めて

……

その小さな呪で、俺を踏み付けて？

その言葉に、ぞわわわわ～っと全身に鳥肌が立つ。
私はひゅっと息を吸い込み、

右手を振り上げ、「いやあああ……変態っ！ 離れてよおつ」と叫びながらそのまま振り下ろし 硬くてぶ厚い本の背の部分で、ウツトリとした表情で私を見詰めるクロフォードさんの額を殴りつけていた。

「いやあ～、『めんどくさん』

「…………」

バリケード様に、黒ラブちゃん エルダーくんを抱き締め、クロフォードさんを睨み付ける私。

赤くなつた額を摩するクロフォードさんは「ホント、もつ正気に戻つたから大丈夫だよ」と、苦笑する。

貴方の言葉は信じられません！ とにかく風に無言の通り睨み付ければ、彼は頭をポリポリと搔いた。

「……ホント、信じられないくらい、俺つて琴海ちゃんの前では本性をさらけ出してるよな」

こんなハズじゃなかつたのにな……と咳くクロフォードさんは、もう一度苦笑してから私の前に跪いて、真剣な顔してこう言った。「俺のマゾ性をここまで刺激してくれる女性は、後にも先にも琴海ちゃんしかいない」

そんな真剣な顔をして言つた言葉では無いのでは……？

微妙な気持ちになりながら固まっている私に、彼がスッと腕を伸ばして來た。

「琴海ちゃん……」

細くて長い指が私の頬を包み、そのままゆっくり移動して 私の脣を親指で撫で上げた。

「琴海ちゃんが何とおっが……絶対離す気はないから

覚悟してて、と耳元で囁くクロフォードさんに、腰が抜けそうになつた。

そして、綺麗なタークロイズブルーの瞳を見詰めながら、厄介な人物に惚れられてしまつた と思つた。
しかし、待てよ？ と考える。

彼のマゾ性を刺激するつて……それは、もしさ私が『S』だと言いたいのだろうか？

いやいやいや！ 私は『S』でも『M』でもありません。

私はNormal つまり、『N』ですから！

「疲れたあ……」

仕事帰りに、これから皆で飲みに行きましょ　と、しつこく俺の周りを付き纏う女性達から何とか逃れ、やっと心休まる場所（自宅）に帰つて来る事が出来た。

自分で言うのもおかしな話だが、見た目が優れているというのも、そんなに良いものではない。

知らない人間が自分の彼女になつている事などじょっちゅうだし、ストーカーに付き纏われたりもする。

まあ、嫌な思いもしてきたが、それ以上にオイシイ思いは沢山している。

「…………もうダメ」

鞄を適当に床に投げ出し、ネクタイを緩めながらソファーの上に倒れ込む。

「ああ…………眠い…………」

つつ伏せから仰向けに向き直り、緩めたネクタイを外して床に投げ捨て、畳を閉じながらスーツの鉗を外す。

畳を閉じれば　「ちら（日本）で出来た、可愛い恋人の顔が直ぐに浮かんでくる。

「琴海ちゃん」

愛しい人の名前を呴けば、自然と口元が緩んでいくのが分かる。

初めて、心から『欲しい』と思つた女。^{ひと}

大っぴらに言い触らすことが出来ない自分の性癖を知つても、普通に接してくれる心優しい俺の恋人。

つい最近、（ある意味無理やり）琴海ちゃんを自分のモノ（あ、彼女という意味ね？）にした。

キスをした後、潤んだ瞳で見上げる琴海ちゃんは　この俺でも、加虐心が湧き上がる顔をしていた。

まあ、直ぐにブ厚い本で脳天チョップを食らって、『＼』が出てしまったが……。

そんな愛しい彼女の顔を思い浮かべていると、だんだんウトウトしてきた。

「…………ヤバい。」のままだと、本当にここで寝てしまつそのまま寝たい誘惑に駆られるも、ここで寝たら風邪を引くと思い、急いで体を無理やり動かして寝室に向かった。

少し長い廊下をペタペタとスリッパの音を立てながら歩き、漸く目的の場所に着く。

寝室の扉を開ければ、直ぐに大きなベッドが目に入る。
そこへダイブしたい気持ちをグッと堪え、ノロノロとスーツを脱ぐ。

ワイヤーシャツとTシャツ、それに靴下を洗濯かごの中に入れて、クローゼットの中からスウェットのパンツを取り出してそれを穿く。スーツが皺にならない様にハンガーにかけてから、消臭＆皺取りスプレーを掛けた。

それらを全てやり遂げてから、俺はTシャツを着るのも忘れてベッドの上に倒れ込んだ。

限界に眠い。

おやすみいー、と咳きながら枕に顔を埋め、ウトウトとしてきた頃。

廊下から、カツ、コツ、といつ音が聴こえてきた。

「…………？」

枕から顔を上げ、開ききらない瞼をなんとか開けて、廊下へ続くドアを見詰める。

耳を澄ませ、意識を音のする方向へ向けると、

「…………靴音？」

どうやらその音は、誰かが廊下を歩いている靴音だと分かった。泥棒？と思つた時、高い音を立てる靴音が、自分がいる寝室の前で止まつた。

そして、力チャリ……と、ドアのノブが回る。

ドアが全て開ききる前に、人の家に勝手に入つた來た人物を捕らえようとベッドから飛び出す。

が、寝室に入つて來た人物を見て、俺の体は動きを止める。

何故ならそれは……。

「こここここ、琴海ちゃんっ！？」

そう、寝室に入つて來た人物が、俺の愛する琴海ちゃんだったからだ！

非常口のマークの様な格好で固まる俺は、急に現れた琴海ちゃんにも驚いたのだが……さらに、彼女の着ているモノを見て、目を見

開く。

なんとそこには 。

超スケスケの、シースルーベビードールのネグリジェを着た琴海ちゃんが！

しかも、その下にはピンク地に黒とピンクのフリフリレースが付いた、エロ可愛いブラとショーツ。

太股には、黒のレースにピンクのリボンが付いたキャットガーターを付け、口サージュ付きのピンヒールミューールを履いている。そして 手には乗馬鞭が握られていた。

「どう、そ、こ、うええ！？」

どうしてそんな格好でここにいるの琴海ちゃん。

と言いたかったのだが、驚きが大き過ぎて口が回らなかつた。

そんな俺を見た琴海ちゃんは、恥ずかしそうにしながら俺の目の前今まで歩いて来る。

固まる俺に、惱殺的にエロ可愛い琴海ちゃんは、潤んだ瞳で俺を見上げながらじつ言つた。

「私…………大好きなアレクさんの為に、今日は一生懸命頑張ります！」

「へ？」

頑張るって……一体何を？

首を傾げながら、「！」、琴海ちゃん？と手を伸ばしながら声を掛けた瞬間。

ペシングー

「はうんー」

手の甲に走った氣持ちイイ痛みに、鼻から変な声が出てしまった。
「琴海ちゃんじや、あつません」「は？」

きよとん、と琴海ちゃんを見下ろせば、彼女は掌で鞭をペシペシ叩きながら口を膨らませている。

「これから私は、アレクさん……ううん、アレクの『主人様』になるのよ。だから、『ちやん』付けはダメ！」

「ああ、じゃあ 琴海様とか『主人様』……それか、女王様がいいのかな？」

「ちつがーうつー！」

「へ？ じゃあ、なんて呼べば……」

それ以外になにがあるんだ？ 首を捻れば、琴海ちゃんはいつ言った。

「京野さんー」

「…………」

ナゼに『さん』？ しかも、苗字だし。

不思議な発想の琴海ちゃん 改め、京野さんは、手はじめといつた感じに俺の体をペシペシと軽く鞭で叩き出した。

何も着ていない上半身に、鞭のペチペチといつ音と刺激が心地イ

イ。

「ねえ、この位はどうなの？」

「もう少し強くても大丈夫 大丈夫です」

ペチンペチンペチン。

「これは？」

「…………ん、もうちょっと…………強くてもいいです」

「ううう…」

ベチンッベチンッベチンッベチンッ…

「あ、んん……その位で、ちゅうどい、はあ、いいかも……ふう、ううん？」

鞭で叩かれ、しごれるような痛みに眼を閉じて甘い息を漏らしていれば、何故か鞭の刺激がピタリと止まる。

「こと 京野さん？」

「誰が、勝手に気持ちよくなつていいくつて言つたのかしら?」

「…………あ」

まるで、気分を害されたと云つて、京野さんは長い睫を伏せた。そして、

「こんなに堪え性がないなんて……ホント最低」

「はうんん……」

心底汚らわしいモノを見る様な目付きで見詰められながら、そこへ吐き捨てるかの様に言われた言葉に

俺の胸がトクンッ！ ヒ、トキメイた！

今までの俺は、女王様気質な人（あえて言つならオトナっぽい女性）から言葉責めにされたり、縛られたり、ロウソクを垂らされたり、鞭で叩かれたり etc……が好きで、よく、そのような女性がいそうなSMクラブに密かに通っていたりしていた。

大人の魅力溢れる女性から、冷たい眼差しで見詰められるのに、よく興奮していた。

それ以外の人間には、あまり快樂を味わった試しがなかつた。だから、俺の性癖を知つても離れること無く、尚且つ性的欲求を高めてくれる人間は、大人っぽい熟れた女性だと思っていた。

しかし、目の前にいる女性によつて、その考えは覆される。

琴海ちゃんは、それまでにはない高揚感とトキメキとほんの少しの背徳感を俺に与えてくれる。

何故背徳感を感じるのかといふと…………京野さん＝琴海ちゃんは、俺が見た感じでは、どう見ても外見年齢はまだ未成年の、可愛い女の子にしか見えない（胸とくびれとお尻は立派な大人）のだ。そんな琴海ちゃんが、エロ可愛い下着姿で鞭を持っていんだよ？

もう、興奮しまくり！

「私を無視して考え方？　ずいぶん余裕があるのね」

一人でトキメキながらボーッとしていたら、それに怒つた琴海ちゃんにお腹を蹴られた。

「うぐふつ！？」

ガラ空きになつていた腹にきた、いきなりの蹴りに、少し息が止まる。

でも気持ちイイ……。

前屈みになつてお腹を両手で押えていたと、琴海ちゃんに肩を押されてベッドに倒れ込んだ。

ボスンッと倒れ込みながら、俺は首を傾げていた。ピンヒールで思い切り人を蹴ると、下手したら皮膚に穴が開く危険がある。

それを琴海ちゃんは、相手に程良い痛みを与えつつ、尚且つ大怪我を負わせないようになって蹴っていたのだ。

いつの間に、こんな高度なスキルを……？

もしや、琴海ちゃんが以前付き合っていた人物に仕込まれたのか！？と一人で考えていると、ギシリ……とベッドが軋み、俺を跨ぐようにして琴海ちゃんがベッドに乗り上ってきた。

倒れそうで、危なつかしい彼女に手を差し伸べようとすれば、ペちり、と手を叩かれた。

「勝手に触らない！」

「あ、『ermenなさい』

「だめ。もう許しません」

琴海ちゃんは、俺の手首を掴むとそれを頭上でクロスさせ、どこから取り出したのか、俺の手首に頑丈そうな手錠をガチャリと嵌めた。

「これでもう、私に触ることが出来ないわ」

そう言った琴海ちゃんは、俺の頬から首筋、鎖骨から胸までを乗馬鞭の先でコルコルと撫で、囁いた。

「これからが……お楽しみの時間よ？」

唇をペロリと舐め、H口可愛い下着姿で俺の腹の上に跨る琴海ちゃん。

外見とは正反対な妖艶な姿に、俺のテンションは一気に上がる…。一体、琴海ちゃんは何をこれからしてくれるんだと思つていると、

ペシリ。

顔を舐められた。

へ？ と固まる。

俺の期待をよそに、琴海ちゃんは一心不乱に俺の顔をペロペロ舐めるのだ。

「…………あ、の」

「ペロペロペロ」

「！」京野さ……っ わっふー！？」

「ペロペロペロペロ」

「ちゅちゅちゅ、ちゅうじゅう」と待つて…」

「ん？」

「はあ、はあ……京野さん、一体なにが…………へ？」

顔を振り、漸くペロペロ攻撃（まあ、嫌いではない）から逃れられた俺は、琴海ちゃんを見て驚く。

いつの間にか、琴海ちゃんの頭とお尻には、犬の耳と尻尾（黒色）が付いていた。

しかも、身に着けている全ての物が、黒の色に変わっていた。

一体いつ着替えたんだ？ と驚いていると、そんな俺を尻目に、琴海ちゃんは尻尾をフリフリ揺らしながら、一カツと笑つてこいつにつけた。

「アレク兄さん、おっしゃ～～！ オレ腹減った。早く朝メシくれ～！」

ここで、パチリと目が覚めた。

そして。

「ワンっ！」

人の顔を舐め回す、愛犬エルダーが視界いっぱいに飛び込んで来た。

「え、エルダー？ 何でお前がここに……ってか、京野さんは！？」

人の上に乗つかるエルダーを降ろして、エロ可愛い琴海ちゃんが何処に行つたのかを探す。

しかし、琴海ちゃんは何処にもおらず、床に適当に投げられた鞄とネクタイがあるだけで、その他には皺になつたスーツが眼に入るだけであった。

「…………夢かよ」

今までの事が、唯の夢であつたことに肩を落とす。

朝メシ！ と吠えるエルダーを見詰めながら、「クソッ、目が覚めた原因はお前か。あともう少しでいい思いが出来たのに……」と呟いた。

「はあ～あ、そうだよなあー。琴海ちゃんが、あんな格好をして俺の前に出てくれるはずがないもんな」

でも、エロ可愛い下着で乗馬鞭を持った琴海ちゃん…………あれは癖になりそうだ。

夢じやなく、いつか現実でもあんな格好をして俺をイジメて欲しい。

ところが、この日からの俺の願望である。

(後書き)

とってもとっても遅くなりました。

お気に入り登録が200件も！

ありがとうございます！！

「……ううへん。どっちがいいかな？」

休日の朝早くから、私は両手に洋服を持ち、それを自分の体に交互に当てながら姿見鏡の前で唸っていた。

右手には、黒色のキャミロンピースと、その上に薄紫色で少し口紐の、やわらかなニット天竺素材のカーディガンが掛かっている組み合わせの洋服を持っている。

キャミロンピースの、ティアードのフリルレースが可愛くて、自分の中ではかなりのお気に入りの洋服である。

これに、黒のブーツを組み合わせる予定。

そして、左手には、パープル系のチョックチュニックワンピースにボアベストを重ね、レギンスをチョイス。

これには、ファー付きの編み上げショートブーツと、ポンポン付きのニット帽を被る、という組み合わせだ。

「んん~……」

暫く鏡の中で自分とこらめっこしていた。

そもそも、なぜこんなにも洋服の事で悩んでいるのかと聞つい。

アレクさんに、今日デートをしようと誘われたからです。

先日、晴れてアレクさんの『彼女』に（ある意味強引に）なった私。

クールな見た目に反して、言葉責めや痛いのが大好き　　といった性癖を持つ、M男であるアレクさん。

そんなアレクさんではあるが、何かの拍子で暴走しなければ、いつも通りのイケメン外国人な訳で……。

自分でも、かなり現金な奴だなあ」とは思うが、面食いな私は、初めての彼氏がアレクさんである事をかなり嬉しく感じていた。だって、それ（Mな性癖）以外は、『顔良し、声良し、性格良し。ついでに背も高くてお金もある』といつ、普通だったら絶対に手の届かない人だし。

とまあそんな訳で、

私は今、初彼との初デートで着ていく洋服選びで、悩んでいる最中なのである。

「むう～…………もうこんな時間が。化粧をする時間もあるし……よしつ！」「これにしよう」と

携帯の時計を見れば、家を出る時間が迫ってきていた。
私は悩みに悩んで、左手に持っていた服を着ることに決めた。
今日のデートは、私の希望で遊園地に行くことになったので、これでいいでしょう。

私は決めた服にワタワタと着替えると、途中半端にしたままのメイクを全て終わらせ、ニット帽を被った。
それからもう一度、姿見鏡で全身をチェック！

メイクOK！ 髮型OK！ 服装OK！ 持ち物も……OK！

「 よし！ それじゃあ、行きますかあ～」

バックを片手に玄関の鍵を持ち、私は部屋を出る。

アレクさんとの初デート。

何もかもが初めての事に、ワクワク感とちょっとした緊張感が私を包み込む。

外に出ると、今日は雲一つ無い快晴である。

私は、ルンルン気分でアレクさんとの待ち合わせ場所に向かったのであった。

私の家から徒歩20分くらいの所にある喫茶店に、私はアレクさんとの待ち合わせ場所に選んだ。

そこはあまり人に知られていない場所で、御歳70歳になるロマンスグレーなおじいちゃんが1人で営業しているの。緩やかなクラシック音楽が流れていて、周りには緑豊かな植物たちに囲まれ 愈されます。

そう、癒しを求めて休日などはよくここに来ていてる。所謂、常連客です。

そんな喫茶店内で おじいちゃんが「コーヒー豆を挽いている音を聞きながら、私はカウンター席に座っていた。予定していた時間よりもかなり早く着いた為、私は本棚に置かれている雑誌を時間潰しに読んでいた。

雑誌を見ながら携帯の時間を気にしながら見ていると ドアのベルがチリンチリンと鳴った。

ハツとした私は、雑誌からドアの方へと視線を向ける。

「アレクさん！」

ドアから室内に入つて来た人は、待ち焦がれていたアレクさんであつた。

私が声を掛けると、直ぐに私に気付いたアレクさんは、会社に入る時とは違う優しい表情で笑いながら私に近付いて來た。

そして、私が頼んで飲んでいたカプチーノを見ると、首を傾げた。
「お待たせ、琴海ちゃん。 もしかして、結構待つてた？」

「いいえ、思ったよりかなり早く着いたんです。アレクさん

は時間通りに来ましたよ

「そつか、待たせちゃって悪い」としたなつて思つたよ」

アレクさんはやう言つてから、私の服装や髪型等を見て「いつも可愛いけど、今日は更に可愛こよ」とか「惚れ直した」とか「こんな姿他の男に見せたく無いな」とか、聞いていぬじが恥ずかしくなつちやう事を何でもない様に言つてくれる。

女として、とても嬉しく思うが……。

向かい側で「笑いおじこちゃんが、気になつてどうしようも無い私あります。

体温と顔の温度が徐々に上昇していくのを感じながら、少し残つたカプチーノをグビリと飲み干す。

「おじいちゃん、」馳走様でした。 お会計お願いします

「はいはい」

カウンター席から立ち上がり、昔風のレジスターが置いてある場所に向かつてからお会計を済ませる。

又来ます、とおじこちゃんに挨拶してから、アレクさんと共に店を出る。

チリンチリンとう音が聞こえなくなると、後ろを歩いていたアレクさんが私の手を取つて指を絡めてきた。

「つー? ……あ、の?」

ビックリして斜め後ろを振り向けば、

アレクさんが甘い瞳（普段の3割増）で私を見つめていた。

私の顔の熱と心臓の鼓動が、ギュウーン！　と一気に上昇する。アウアウと口を開閉させながら、繋がれた自分の手と彼の顔を交互に見ていると、

「クスクス……本当に可愛いね、琴海ちゃん。今ここで食べちゃ
いたいぐらこだ」

「へ？ 食べ？」

アノカジマは織二で一辺

アレクさんは繋いでいた手を自分の顔の高さまで持ち上げる。スウっと田を細めた彼は、唇を手の甲ぐと並て口付ける。

心の中で盛大に悲鳴を上げる。
なんとか声は出せなかつた。といふか、驚きのあまり出なかつた
のだが……。
そんな私を無視して、アレクさんはそのまま唇を肌に付けながら
下に下りて行き。

手首をキツク吸い上げるようにして、ちゅうとキスをした。

卷之三

チクリとした痛みに反射的に手を引っ込めたら、それを察した彼が手を離してくれた。

自由になつた手を胸元に抱え込むよつこして、アワワワワー！？
と慌てながら彼を見上げれば。

「ん？ ああ、今のは…………俺がどれだけ琴海ちやんを思つ

ているか、行動で表したのと

「

変な虫が付かないように、印をつけただけ。

慌てて自分の手首を見れば 口付けられた場所に、赤い斑点が出来ていた。

これはもしゃ…… 小説や漫画でよく読むキスマーク…… だろうか？

手首を見て固まる私を無視して、もう一度人の手を掴み、指を絡めるようにして手を繋ぎ直すアレクさん。

見た事もない魅惑的な表情をして私を見下ろす彼を見ながら、その時、私はある事を思い出していた。

手の甲へのキスは 尊敬。
手首へのキスは 欲望の…… キス。

目の前にいる人が、私にその様な思いを抱いている事に思考が停止する。

そんな私を見て、アレクさんはフツと笑うと 耳元でこう囁いた。

「今は、唇へのキスは我慢するから…… 後でいっぴいちょうだい？」

ボンッと顔が赤くなる。

「…………

「それじゃあ、行こうか?」

アウアウアウアウ……と何も言えなくなる私を、ニッコリ笑いながら見下ろすアレクさんが憎い。

てくてくと手を引かれながら彼の後を歩きながら、唇のキスは『愛情』の意味を持つと言つことを思い出し、更に顔に血が集まつてくる。

恋愛初心者の私には、こんなやり取りは慣れていないの。

彼はちょっと……いや、かなり上級者向けな彼氏なのではないのか? と思つ私なのでありました。

02 (後書き)

評価をして下さった皆様、そして、お気に入り登録して下さった皆様。
ありがとうございます！

指を絡め、恋人繫ぎでドキドキしながら歩いていれば……。

あつといつ間に今日の目的地でもある遊園地に着いてしまった。

思つていたより早く着いたなーと思ひながら、チケットを買うのに財布を取り出す。

しかし、ここは俺が出すよとアレクさんに止められてしまつた。初めは、悪いのでいいですよと断つていたのだが、誘つたのは俺だからと強く言われ　ここはありがたく、お金を出してもらつことにする。

そんなこんなで、アレクさんと共に遊園地の中に入れば。

「……人が多いですね」

休日だからか、家族連れだつたり、私達みたいなカップルが溢れ返つてゐる。

見渡す限り、人・人・人。

……おえつ。

人酔いしそうです。

クラクラと目眩を起こしかけていると、

「琴海ちゃん、どこから行く？」

ギュッと手に力を入れ直したアレクさんが、パンフレットを見ながら聞いてくる。

私は軽く頭を振つてから、アレクさんが持つてゐるパンフレット

の中を覗いてみた。

遊園地の広大な敷地内には、絶叫系のジェットコースター、くるくる回るメリーゴーランドやティーカップ、その他には幽霊が出てきそうなホラーハウスや、恋人達なら誰でも一度は乗るとは思う巨大観覧車等が目に付いた。

「どこか行きたい場所とか、乗りたい物とかある？」

「あ、あの！ それじゃあ、私、これがいいです！」

それではと、私は一番興味が惹かれたモノに指を差した。

「……………」

「はいー」

「……………」

何故かアレクさんの表情が固い。

「どうかしたんですか？」

「いや、まさか、琴海ちゃんがこいつ言つたモノが好きだとは思わなくて」

「小さな頃は苦手だったんですが、大人になるにつれて好きになりました」

だつて、人目を全く気にせずに、思いつつ切り叫べるんだもん。

そう、私が乗りたいモノは絶叫系だったのです。

一瞬、初めてのデートにはティーカップとかの方がいいかな？とか思つたけど、同じ所をぐるぐる回つていると具合が悪くなってしまう。

酔つて彼氏の前でリバース（吐く）するよりは、そっちの方がいいでしょう。

と、言つ事で絶叫系を選んだんだけ……。

「あの、ダメ……でしょつか？」

ジーツとパンフレットを見詰める彼に声を掛ければ、即座にジーツ

「リ笑つて大丈夫だよと言ひ。

「ホントですか？」

「ああ。それじゃあ、早速そちらへ行こうか」

「はい！」

アレクさんはパンフレットを畳んでポケットの中へと仕舞うと、もう一度私の手を繋ぎ直して、絶叫系マシーンの方へと歩いて行った。

「つづりうへ。楽しかつたですぅー！」

色々なジエツトコースターを6回連續で乗つた後 私は出口付近で身悶えていた。

普段溜まつていたストレスを、叫んで解消したよつなものだ。正に、

爽・快・感！

「アレクさんも楽しかつたですか？」

「…………ああ、」

振り向けば、表情は微笑んだままなのに、顔色が心なしか悪い。

絶叫系は嫌いでは無いみたいだが、流石に連續6回は効いたようだ。

「琴海ちゃん、次は……ちょっと違う物を見て回らない?」

「あ、はい。そうですね」

アレクさんはそう言つと、ポケットから素早くパンフレットを取り出し、絶叫系の近くに何があるのか確認する。

「あ、この直ぐ側にホラーハウスがあるな」
その言葉に私は固まる。

私は苦手な物が何個がある。

その内の一つが『暗い所』。

どれだけ苦手かと言つと 夜寝る時には、ベッドサイドに小さなスタンダードライトを置いて、部屋を真っ暗な状態には絶対にしないくらい、『暗い』のは苦手なのだ。

なのに。

ホラーハウス=『真っ暗な空間』に行くだなんて!?

「さつ、そうと決まれば、早く行こうか」

「いや、あの、私はちょっと……」

「ほら、琴海ちゃん。早く行こう」

「私、ホラーハウスは

「ほらほら、離れて歩くと迷子になるよ?」

手を繋ぐのではなく、私の腰を抱き、アレクさんは人の話を一切

聞かずにズンズンと歩き進める。

手を繋ぐ行為よりも更に密着する体勢に胸がトキメクが。

これから行くホラー・ハウスを考えると……違った意味で、私の胸はドキドキしてくるのであった。

ひゅ~、エヌビアエヌビアエヌビア……。

ホラー・ハウスでお馴染みの音を聞きながら、私達は入り口の前に立っていた。

アレクさんのワクワクとした表情を見ながら、私は泣きたくなる。

あううう……入りたくないよ。

逃亡しようにも、アレクさんに恋人繫ぎをされた手でガツチリと掴まれている為、逃亡は不可。

こうなつたら、直接交渉しかない！

「あの、あの！ アレクさん、やつぱり」

「はいっ、お待たせしましたあー！ 次のお客様、どうぞお進み下さい！」

手に力を入れ、彼の注意を引こうと試みようとした時 落ち武者の格好をした男性スタッフに、いいタイミングで遮られた。

「さつ、それじゃあ行こうか、琴海ちゃん」

「つうう……はい」

こうして、数十年ぶりに私はホラー・ハウスなるものに足を踏み入れたのである。

「つひいいい！？」

目の前に突然現れた、着物を着たおかっぱ頭の女の子を見て固ま

る。

あまりの恐ろしさに、繋いでいる手を自分の胸元に持つて来て、ぎゅ～っと握りしめた。

「う……つと、大丈夫？」 琴海ちゃん

「は、はひ。大丈夫です」

ドッヂドッヂ、と早鐘を打つ心臓を押さえつつ、何とか頭を縦に振る。

その際、アレクさんが変な声を出した事を気にしている余裕は無かつた。

女の子はニシコニ笑うと、すう～っと消えてしまった。

どこに行つたのか気になつたが、繋いだ手はそのままに、アレクさんの腕に自分の腕を絡ませながら廊下の先へ進む。

恐怖心に呼吸が荒く、早くなり 視界も狭くなる。

ビクつきながら、廊下の角を曲がれば……。

「おねえーちゃん。あ～そ～ぼお～」

先ほど田の前に現れた、あのおかっぱ頭の女の子が……田から血の涙を流しながら、あはははと笑いながら近づいてくるではないか！

「ふぎやあああつー？」

「あう！」

アレクさんと繋ぐ手に、んぎゅーつー と更に力が籠り 無意

識に爪も立てていたらしい。

頭上から、また変な声が聞こえてきたが、

「い、ーや、あー！」

私は後ろから尋常じゃないスピードで追いかけてくる女の子から逃げるのに必死で、悲鳴を上げながら反対側の廊下へと駆け出す。

アレクさんは私に手を引かれながら、「はう！」とか「あぐうつー？」とか変な悲鳴を上げていた。

そんな感じで、私達はホラーハウスの中を叫びながら懸命に移動

していた。

途中、足を掴まれたり、頭上から降つて来た変な物体に頭を触られたりしていたが、その度に私は奇声を発したりしながらアレクさんに抱きついていたりしていたのだった。

もう、恥ずかしいとか思う暇がなかった。

怖いーー！　怖すぎるよー。

私は目を瞑り、アレクさんの腕にくつ付きながら思った。

何で、お金を出してまで、こんな怖い思いをしないといけないのか　と。

ホラー・ハウスに入る前に、トイレに入つて本当に良かつた。

そして、もう一度とこんな所には来るまい。

半べそをかきながら、そんな事を思つていたら、

「はあ、はあ、はあーっ。……もう、終わりだから。大丈夫だよ」
息を切らした感じのアレクさんに、頭を撫でられながら出口はもう直ぐだと言われる。

はて？ そんなに走つたかな？ と首を傾げるも、恐怖心で鈍つた心は鈍感になつてゐるらしく、そこは何とも思わなかつた。

アレクさんが言つ通り、もう出口が近いのか、周囲が大分明るくなってきた。

「出口だ！」

「うん。頑張ったね、琴海ちゃん」

「はい」

やつと、この恐怖から開放されると 気を抜いた瞬間。
天井から、何かが逆さ吊りのまま落ちて來た。

「う、お、おおあ、ああ、あ！」

顔が所々溶けたゾンビの顔が、顔面すれすれにある。ドロリとした緑色の皮膚。

右の目玉は飛び出し、左は真っ黒の空洞になつている。私は近くにいたアレクさんに飛び付いて（その時、私の頭と何かがガツンとぶつかった）抱きつくと。

「あぎやあああああ、あ、あ……あ……はふう」

今までに無い程の悲鳴を上げながら、私の意識はブラックアウトした。

ざわざわとした喧騒に、意識が浮上する。

重い瞼を徐々に開ければ、暗闇ではなく、青空が見える。

「ああ、起きた？」

「……あれ？　ここは？　いままでホラーハウスにいましたよね」

「ホラーハウスはもう出たよ。出口の前で、琴海ちゃん意識を失っちゃったんだよ」

「え？　それは……」迷惑お掛けしました

人通りが少ない木陰に置かれているベンチで、アレクさんの肩に頭を預けて寝ていた私は、恥ずかしくて顔が熱くなつてくる。

肩から顔を離せば、心配そうな顔をしたアレクさんが私の顔を覗く。

「それより、気分は？　気持ち悪くない？」
「はい、大丈夫です」

「それは良かつた」

ニコッと笑うその優しげな表情に、釣られて私も笑いそうになつた時、ふと、アレクさんの頸が赤くなつてゐるのが目に入る。

「あれ？ アレクさん……頸、どうしたんですか？」

私がそう聞いた瞬間、彼の瞳が熱を持ったように潤む。

う、つ！？

私、何かいけないスイッチ押しちゃつた？

口元を引き攣らせていると、私を囲むようにして背凭れに両手を付けたアレクさん。

麗しいお顔が接近中！

近い近い近い！ と背凭れに思いいつ切り顔を反らせるも、限度がある。

ふうっと、熱い息が首元に掛かつた。

「琴海ちゃん、俺……あんなに焦らされたの初めてだよ」

「へ？」

「気付いてなかつた？」

アレクさんはフフフと笑うと、私の目の前に左手を持つて來た。何だろう？ と目を細めて見てみれば、彼の指や手首には、うつすらと赤い手形が付いており、手の甲には、くつきりと爪の形が付いていた。

「…………」「…………

これはもしゃ……と、伺ひよつて視線を上げれば、ウットリとした瞳とかち合つ。

「そう、これは琴海ちゃんに付けられた跡だよ」

その言葉に、どんだけの力でアレクさんの手を握っていたのよ私は！ と心の中でツッコむ。

慌てて謝ろうとした時、アレクさんが手首に唇を寄せ、赤くなつた跡をぺろつと舐めた。

アレクさんが手首を舐める仕草がとてもH口く見えて、ドキッ！
つと心臓が高鳴るが、

「琴海ちゃんが驚いて叫ぶ度に、程よい痛みが断続的に続いて……
もうホントにたまらなかつたよ」

続く言葉に、心臓の音も平常のリズムに戻る。

そうだった。この人はこいつの人だった。

忘れていた彼の性癖に、ガツクリと頸垂れる。

そんな私にお構い無く、彼は頬を染めてこいつの言つのであつた。

「でも……出口の所で顎に食らつた頭突きが凄く快感で……ク
ラクラするくらい、一番気持ち良かつたよ」

それは唯單に脳震盪のうしんとうを起こしかけてクラクラしていたんでしきう。
と、ツツ「ミたかつた。
やはり、彼は真正しんせいの変態なのだと、認識を新たにした私なのであ
つた。

04（後書き）

大変お待たせ致しました！

「あの……ちょっと離れてください」

人通りが少ないベンチの上で、私はアレクさんの胸に手を当てて、これ以上近付いて来ない様に力を込めていた。

先程『M』のスイッチが入つてしまつたらしいアレクさんは、椅子の背に両手を当てて、私をその腕の中に閉じ込めていた。

目元をうつすらと赤く染め、薄く開いた唇からは熱い吐息がこぼれ落ち、潤んだ瞳で私を見下ろすその姿は　目を逸らせないほど色っぽくて……。

子供達が賑わう遊園地内で、不健全な雰囲気を全開に醸し出していた。

誰かに助けて欲しいが、こんな場面（はたから見たら、恋人同士のじやれ合い）を見られたら見られたで、それは恥ずかしい。どうしたらいいの〜！？

顔を真っ赤にさせ、俯きながら両腕に力を入れていると、頭上でクスリと笑う声がした。

何を笑うか、と顔を上げれば……惚れぼれするほど整つた彼の顔が目前に迫っていた。

「ひやつ！？」

驚いて、彼を押さえていた手を緩めてしまった。

田の前の御仁は、その隙を見逃すはずはなかつたのです！

「赤くなつて……可愛いね」

彼はそう言つと、突つ張つていた腕を片手で一掴みし、一瞬にして唇を合わせてきた。

唇に伝わる、温かくて柔らかな感触。

最初はただ押し当てられているだけであつたが、次第に下唇やら上唇を食まれる。

あまりの事に目を閉じられずにいると 髪の毛と同じ色の睫毛を伏せたまま、チュツチュツチュと人の唇にキスをしていた人が、スツと目を開けた。

「その小さくて可愛いお口を開けて、琴海ちゃん」

フツと笑い、唇を合わせたままそんな事を言つアレクさん。耳にまた、チュツと言つ音が聞こえて来た。

ん？『M』のスイッチが入ったはずなのに、なんか、今のアレクさんは『M』じゃないような……。

そんな事を思つも、今の私の思考は限りなく鈍くなつていた。

ふわふわとした気持ちいい気分のまま、私はアレクさんの言われた通りに、合わせていた唇を開ける。

私が従順に口を開けた時 アレクさんは顔の向きを変えると、背凭れに付いていた手を私の体に回した。

グツと近づくアレクさんの逞しい体。

甘いような、清涼感がある香水の匂いを吸い込みながら、ゆっくり

りと瞳を閉じた時　。

「ねえ、喉が乾いたから飲み物買って！」

後ろから聞こえて来た声に、私は脊髄反射のような速さでアレクさんの頭を掴み、どこからそんな力が出たのかは分からぬが、彼の頭を膝の上に無理やり押し付けた。

今……聞こえて来た声つて……。

む『』！？ と変な声が膝上から聞こえて来たのだが、今は無視です。

人の体に腕を回した状態で、モゾモゾと動くアレクさんの頭を両手で押し付けたまま、私はそうっと後ろを振り向いてみた。

私が座っているベンチの真後ろに、背を合わせた感じで同じベンチが置いているのだが、そこに向かって、とあるカップルが歩いて来る。

歩いて来るカップルの女性の方を見た私は、盛大に顔を引き攣らせた。

何で……あの美女軍団のリーダーがここにいるのぉ！？

そう、アレクさんと少しでも御近付きになろうと、日々彼の周囲を取り囲む美女軍団のリーダー的存在の人達が、パツと見惚えない男性を連れて、こちらに歩いて来るではないか！！

「ふはあつ。……どうしたの？ 琴海ちゃん わっふー？」

驚きで緩んだ手の下から顔を覗かせたアレクさんに、私は帽子を急いで脱ぐとそれを無理やり被せた。

そして、彼の顔を包む様にしながら私の膝に押し当てる、なるべくアレクさんの顔が見られないようにした。

人が今の私達を見れば、彼氏がベンチの上で彼女の膝の上で寝ている 様に見えるだろう。

「琴海ちゃん？」

「声を出さないでください！」

目深に被せられたニット帽を捲り上げ、きょとんとした顔で見上げてくるアレクさんに、私は小声で注意する。すると、アレクさんはニット帽を被り直すと、ポスンと私のお腹に向かつて顔を押し付けてきた。

「むう？」

じりじりとお腹に向かつて押し付けてくる彼の顔をガシッと掴み、それ以上の進行を防ぐ。

なんて言うか、落ち着かない。

これ以上進まれば、股間に彼の顔が……！！

「ちょ、アレクさん！」

「…………」

小声で抗議しても、無視された。

しかも、私の体に回されていた腕に力が入り、しがみつかれる様な感じになつた。

ちょっと、本当になんなんですか！

グググと、地味な攻防戦を繰り広げていると 後ろのベンチにドカリと座る衝撃が、背中合わせになつたベンチごしに伝わってきた。

「清美さん、何を飲みたいですか？」

「は？ そんな事もいちいち言わないと分かんないわけ？」

「す、すみません」

「つたく、使えないわね……。いいわ、冷たいレモンティーでも買ってきて」

「えっ！？ あのぉ～、レモンティーはいいでは売つてないみたいですが……」

「もう！ 何でもここから、早く買つてきてよ！」

「はい！」

慌てたような足音が遠ざかっていって、後ろからチックと舌打ち音が聞こえてきた。

「ホント、使えないヤツ。お金を持つてるからって付き合つてあげたけど……ここまでね」

「…………」

聞きたくないけど聞いたらやつた言葉で、私は心の中で、怖っ！？と叫んでいた。

美女軍団のリーダーこと、花田わん（本名は花田清美）が会社にいる時は全く違う態度に驚きが募る。美人で優しそうな外見に反して、中身ははちゅー我儘お嬢様みたいだ。

性悪そうな花田さんの寒態を知った私は、ハタと動きを止める。

もしも、後ろに私とアレクさんがいるって知られたら、ひ。

次の日、会社で虐められること確実である。

女豹達（美女軍団）のギラギラとした視線を思い出す。ドクドクと、かつて無いほど速さで動く心臓。

アレクさんと一緒にいる時の、トキメクようなものとも、お化け

屋敷にいた時の怖かつた時の心臓の動きとは違つ キューッと締

め付けられるような……痛みが伴うものだつた。

俯き、思考が悪い方へと沈みそうになつた時。

そつと、頬に大きくて温かい手が添えられた。

驚いてアレクさんを見れば、アレクさんは声を出さずに口をパク パクと動かして『大丈夫だよ』と私に伝えると、一ソート帽を深く被り直し、膝の上から顔を起こした。

そして、私の手を掴むと、スッと立ち上がる。

アレクさんはチラリと後ろを振り向き、花田さんが私達の方を見ていないので確認すると、私をすっぽりと包み込む様にして、肩を抱きながら歩き出す。

未だ忙しなく動く心臓。

アレクさんの腰辺りの服をキュッと掴めば、肩に回された手に力が籠る。

「ここまで来れば、大丈夫だらう」

人がざわめく大通りに出た時、アレクさんがそう言つた。

「はあ……まさか、こんな所であの人に会うとはね」

「ビックリしました」

「このままここにいれば、また会うかもしれないな」

「そうですね」

「そうだ。琴海ちゃん、これから俺の家に来ない?」

「このまま帰るのも詰まらないし、DVD鑑賞でもして過ごさない ? と私を見下ろして聞いてくる。

もう少し……アレクさんと一緒にいたいな。

そう思つた私は「クリと頷き、彼の胸元に頬を寄せる。

初めて取つた、私の甘えるような行動に、一瞬アレクさんは目を見開いた。

それから直ぐに、蕩けるような瞳で私を見詰めると、更に体を密着させるように私の体を引き寄せる。

キュンと高鳴る私の心。

初デートは、いい意味でも悪い意味でも、ドキドキの連続であつた。

「はあ～！？ 何もしなかつたなんて……ありえないっ！」

大きな声を出して驚くあつちゃんに、私は彼女の口を塞ぎ、「しいーつ！ あつちゃん声が大きいよ」と小声で注意をした。
「ふはあつ。……いやあ～、『ごめん』ごめん。あまりにもビックリしそぎちやつて」

「そこまで驚く内容かなあ？」

「……あんた、蛇の生殺しつて言葉、知ってる？」

「…………」

給湯室の片隅で、私とあつちゃんは口をつぶして話をしていた。
何の話しをしていたのかと言えば、。

あの日、アレクさんと初デートをした日の事である。

「このまま帰るのも詰まらないし、DVD鑑賞でもして過ごさんない？」

と誘われ、そのままアレクさんと一緒に帰った私。

アレクさんの家に着いた頃には、丁度夕食の時間帯になり、彼の手料理が振るわれた。

美味としか言いようがない料理の数々に、箸が止まらない。

しかも、「この料理にとつても合づんだよ」と言われて出された白ワイン（年代物）を、（お酒が強いワケでもないのに）グピグピと飲んでしまい……。

肉体的＆精神的疲労でとつても疲れていた体と脳に、美味しい料

理とアルコールを摂取した事により、

寝てしまつたのよ～。

ガクリと頃垂れる。

自己嫌悪に漫る私に、追い打ちを掛けるあつちやん。

「いじまでお子ちゃんもとはねー」

「うぐっ」

「アレクさん、かわや呆れたでしょね」

「……あう」

「琴海、あまりにもお子ちゃんな行動ばかりしてると……涎を垂らしている女豹達に、横から搔つ攫われるわよ?」

最後の言葉に、ええ!? と驚きの声を発してしまつた。その瞬間、あつちやんに口を塞がれた。

「しいーっ」

「……ごふえん」

むいむいと言ひながら謝れば、ふうっと息を吐いたあつちやん。

実は私、アレクさんと付き合つてることを、あつちやんにだけは話していた。

私の数少ない 心から信頼出来る友人だから。

でも……あつちやんの口から出て来る心を抉るような言葉に、たまに凹みそうになるけどね。

「酒が強くもないのに、なあ～んでそんなに飲んじゃったのぞ」

「えつと……アレクさんが勧めてくれた白ワインが、思いのほか美

味しくて……」

「ふう～ん。もしかしてアレクさん……この子を程良くな酔わせて、先に進もうとしていたのかしら？……まあ、そうだったら、策士策に溺れるだわね」

自分の足元を眺めながらモゴモゴと喋つていると、頭上であつちやんが何やら呟いていたが、最後の方は声が小さくてよく聞こえなかつた。

仕事もそろそろ終わる頃になると、美女軍団が数人ずつお手洗いに行つては、落ちかけたメイクをバツチリ元に戻して、綺麗な顔になつて自分の席へと戻つて来る。

ナチュラルメイクの私は、あの小さなポーチの中にはどんな魔法道具が入っているんだろうと、いつも思う。

携帯をチラリと見ながら、PCのメールをチェックして電源を切つた。

「お疲れ様でしたー」

まだ仕事をしている人達に頭を下げてから、私は更衣室に直行した。

更衣室に行けば、数人の女性達が着替えながら話し合つている姿が見える。

私は自分のロッカーの扉を開けると、私服へと着替える為にスースを脱いだ。

（――）。

着替え終わると同時に、携帯が鳴った。

慌てながら携帯を開くと 。

『アレク』

彼の名前が液晶画面に表示されていた。

私は一度パタリと携帯を閉じると、回りに誰もいないか確認する。名前を登録するとき、アレクさんに「俺達は付き合っているんだよ？」今直ぐに呼び捨てで呼んでとは言わないから……せめて、口ただけでも『アレク』と入れてくれないかな？」と言っていた。携帯の名前の所からアレクさんと付き合っていることがバレたらと考えるだけでも恐ろしいけれども、イケメンの笑顔＆美ボイス付きでは、拒否出来無かつた。

NOとは言えない日本人気質な私なのである。

そんな私であるが、好きな彼氏から送られてきたメールにはトキメクのだ。

私はコソコソと隠れながら、受信BOXを開いて内容を確認する。そこには。

『お疲れ様、琴海ちゃん。もう仕事終わった？ 終わったなら、地下の駐車場で待ってるから一緒に帰ろう?』

と、あつた。

私はバババババッ！ と鞄の中に物を入れると、ロッカーの扉を

締めて更衣室を出た。

廊下を早歩きで歩きながら、携帯を操作する。

『お疲れ様です。仕事、今終わりました。これから駐車場に向かいますね』

送信ボタンをポチッと押して、「送信されました」と書かれた文字が出てから携帯を閉じる。

私は携帯をコートのポケットに仕舞つてから、地下に行くエレベーターへと少し駆け足で向かった。

それから10分後。

エレベーターを降りて地下の駐車場に行けば、車には疎い私でも高級車であろうと分かる車が、ずらあ~りと並んでいるのが目に入る。

そう言えば、うちの会社は重役や一部の人間しか車出勤は許されていなかつたはず……。

そんな事を思いながら、アレクさんは何処にいるのかと途方に暮れながら辺りを見渡していると。

「きやつ!?」

突然、後ろから誰かに抱き締められた。
ビックリしながら後ろに振り向けば

「琴海ちゃん」

柔らかく微笑むアレクさんの顔が、私の顔の直ぐ側にあった。
細いよつで筋肉質な長い腕を私のお腹に回し、首筋に顔を埋める。

「うう~っ。久々の琴海ちゃんの匂い……癒される……

「お……」

ぎゅうっと私を抱き締めながら、アレクさんは深い溜息をした。
「も～、何だつて俺の回りには化粧品や香水の匂いやらが濃い人しか寄つて来ないのかな……」

顔を埋めながら鼻をスンスンと鳴らし、「はああ～。いい匂い」と言つアレクさんに、微妙な心境になる私。

今私は香水なんて一切付けてないし、仕事終わりで汗も搔いている。

女心としては……体臭が気になるので、離れて欲しいのですが。

「あの、あの！ アレクさん！」

「…………ん？ 何だい？」

「あのお、その～……今の私、仕事終わりで汗臭いかもしけないで、あまり匂いを嗅いで欲しくないのですが」

「ああ、そんな事？ 大丈夫だよ」

首元から顔を上げたアレクさんは、清々しい表情でこいつ言った。

「俺、においフュチでもあるからさ」

……今、聞いてはイケナイ言葉を聞いてしまつたような？

ピキッと固まる私に、「汗の匂いも、そそられるよねー」と笑顔で言われても、頷けない。

アレクさんはもう一度私の首筋に顔を埋め、スウッと息を吸い込むと、

「琴海ちゃんの匂いは……甘くていい香りがするね」

「ひやうっ！？」

温かい感触がしたと思ったら、首をちゅうと吸われた。驚いて、吸われた場所に手を当てるど、少し濡れていた。

「な、ななななっ！？」

「クスクス。これくらいいいでしょ？ 昨日、我慢した！」褒美を貢つても

「……うつ

アレクさんの言葉に、詰まる私。

痛い所を突かれてしまった。

あうあうあう、と真っ赤になりながら狼狽えていると、フツと笑つたアレクさんが私の手を取つて歩き出した。

「今日は、帆立のバター炒めと、たといものそぼろ煮と、アスパラガスのえびマヨネーズあえ。それから、新じぼうとかぼちゃのみそ汁なんだ」

期待してて、ヒヤヒヤアレクさんに、引き攣つっていた顔もほにやりと綻ぶ。

彼が作る料理は凄く美味しいのだ。

普通、女性が男性の心を自分の所へ繋ぎ止めておく為に、料理の腕を上げて「男の胃袋を掴む」筈なのだが……私の場合、男であるアレクさんにがつちりと胃袋を掴まれてしまつていた。

「お腹、空きました。アレクさんが作る料理、早く食べたいです」「指を絡める様にして握られた手を、キュッと握り返す様にしながらそう言えば、アレクさんが優しく微笑んだ。

アレクさんのエスコートで近くに置いてあつた車（左ハンドルの外車）に乗り込むと、私達はアレクさんの家へと向かつたのであつた。

だから、私達は気付かなかつた。

仲睦まじく車に乗り込んで、駐車場を出て行く私達を柱の物陰か

ラジーツと見詰めていた人物がいた事に。

アレクさんのお家に入ると、玄関にはアレクさんの帰りを待っていたエルダー君が、尻尾を左右にパタパタと振つて出迎えてくれた。

「こんばんは、エルダー君」

頭を撫でようとしたら、エルダー君はバタリと床に倒れ込み、お腹を出して「撫でて撫でてつ！」と期待に満ちた瞳で見詰めてきた。私はホニヤリと相互を崩して、エルダー君のお腹を「よしよし」と言いながら撫でまくった。

エルダー君をナデナデしながら、疲れた体と心の癒しだわ~と思つていると。

「なんか、妬けるね」

後ろに立っていたアレクさんがしゃがみ込み、私の耳元でソッと囁いた。

「ひやうー？」

両手でバツと耳を抑えながら後ろを振り向けば、「あれ？ 感じちゃった？」と言しながら艶やかに笑うアレクさんがいた。

「ななな、何をつー」

「ごめんごめん。それより、こんな所に長居していないで中に入ろ

う~」

「…………はい」

靴を脱ぎ、エルダー君を引き連れて家の中に入つて行くアレクさんその後を追つようにして、私も家の中に入つて行つた。

どうして、この人はこんなに美味しそうな料理を作れるのだろうか？

私の目の前には。

香草バター風味のホタテのグリル焼き。

外はカリカリ中はジューシーに焼き上げられた鶏肉に、オレンジソースがかけられた料理。

フォアグラのクレームブリュレに、その隣には味付けされたアボガドやトマトやエビ、それに数種類のフルーツが、カクテルグラスに盛り付けられていた。

そして、シャンパングラスに入った、綺麗な色のシャンパンゼリーが並べられていた。

女として負けている。

美味しそうな品物の数々を目の前に項垂れしていると、エプロンを脱いだアレクさんが「どうしたの？」と声を掛けて來たので、何でもありませんと首を振る。

「とっても美味しそうです」

「そう言つてもられて嬉しいよ」

ナプキンの上にナイフとフォークが置かれ、アレクさんに「どうぞ召し上がり」と言われた私は、「いただきまあーす！」と言いながら、大きな口を開けてアレクさんが作つた絶品料理を食べ尽くしたのであった。

こんなに美味しい料理を食べ慣れちゃつたら……私、アレクさん

から離れられなくなっちゃうかも。

そんな事を考えながら、暇な時にでも料理教室にでも通おうかしらと悩む私であった。

「おいで、琴海ちゃん」

2人で食後の片付けをし終わり、ひと休みしようとした時。背凭れが付いた大きめなクッションに座ったアレクさんが、まだ立っていた私に手を差し伸べてきた。

キョロキョロ辺りを見回し、それからもう一度アレクさんの顔を見る。

恐る恐ると言つた感じに差し伸べられた手に自分の手を重ねると。。

「きやつー?」

握られた手に力が込められたかと思つたら、グイッと腕を引かれ、私はそのままポスンッとアレクさんの胡座をかく脚の間に座らせられた。

ふわり、と香る香水の香りと、掌や体全体に感じられる相手の体温に 私の心拍数は爆発的に上がる。

「、これはもしゃ、恋人同士のイチャつきを……体験しているのかしら？ー？」

ドキドキしていると、アレクさんは私の腰に腕を回して抱き締めながら、そのまま私の頭に頬をくつ付けて擦り寄つた。

細いけれどしっかりと腕に抱かれ、自分の体がアレクさんの

腕と広い胸板にすっぽりと包まれると 不思議な安心感が生まれてくる。

「大好きだよ、琴海ちゃん」

「……あの、あの……はい。私もです」
男の人とお付き合いするのも初めてで、『甘える』行為なんて、どうのこうにしていいのか分からなかつたけど……まずは、私もアレクさんの体に腕を回してみる。

ピクリ、ヒアレクさんの体が震えた。

私は、自分の顔をアレクさんの胸元にスリスリと擦り付けてみた。

「うわ…………」これって結構恥ずかしいかもおつー

緊張と恥ずかしさで、無意識にアレクさんの服をキュッと握つてしまつと。

「はあ……っ。もう、たまんない」

アレクさんは私の頭から顔を離すと、チュッと旋毛にキスを落とした。

「ずっと……琴海ちゃんといつして触れ合つてみたかっただ」
下ろしている髪を指に絡めながら何度も軽いキスを頭に落としていく。

それから、ふう～っと軽く息を吐き出した。

「なんだろ、琴海ちゃんの匂いを嗅ぐと、とっても落ち着く……」

「……ほえ？」

「……匂い？」

アレクさんの胸元に顔を擦り付けながら目をパチパチと瞬かせていると……。

くんくんくん。

私の頭上　頭頂部から匂いを嗅ぐ音がした。

え？　ええつ！？　もしかして、アレクさん私の頭の匂いを嗅いでるのぉ！？

今までの安心感も何もかもが吹き飛び、私は仰天した。

今日は重い資料運びをしていたりと、結構汗をかいっていた。

つきやあー！？ 絶対汗臭いに決まってる！

そんな汗臭く頭をくんくんと嗅ぐなんて……。

「や、あー！」

「むごほおつ！？」

これ以上頭の匂いを嗅がれたくない私は、頭を上に突き出した。

その結果、私の頭を嗅いでいたアレクさんは、顔面にもろ頭突きを食らってしまい、変な声を出しながら頭を仰け反らせてしまった。腕が緩んだ隙に、彼の元から離れようとしたのだが、持ち直した彼にすかさず片手で腰元を抱かれてしまい、逃げる事が出来なかつた。

「やつ！？ 離してバカつ！ 変態つ！？」

腕を突つ張り、離れようと試みるも、コレがなかなか上手く行かない。

しかも、頭突きをしてしまつたことで又しても何かのスイッチが入つてしまつたのか、仰け反らせていた顔を元に戻したアレクさんは……異常なほど興奮していた。

「はふう～。……もう俺、いつ来るか分からない琴海ちゃんの愛ある行為に、スッゲー胸がドキドキする。こんな事、今まで生きて來た中で初めて。癖になりそう いや、もうなつていいかな」

たり……と鼻から流れる真っ赤な血に釘付けになりながら、私はアレクさんの言葉を聞いていたのだが。

「ああ、琴海ちゃん。もつともつと俺を貶して……罵倒して……気持良く感じるほど 傷めつけて？」

どう見ても、違う意味で私の事を熱い瞳で見詰めるアレクさんこそ、私の顔は引き攣るばかり。

「いー やあーつ！？」

彼から逃げるべく、悲鳴を上げながらバタバタと腕やら脚やらを振り回していると。

「何をしているのー？」

バタンっ！ とドアがけたたましく開かれた音がしたと思つたら玄関に通じるドアから、焦つた表情をした人が入ってきた。驚いて目を向けると、そこには、これまた驚くほどオットコ前な外人さんが、目を極限まで見開いて私達を凝視していた。

「んなつー？」

「……あ」

「へ？」

闖入者 + アレクさん + 私のそれぞれの口から、音が漏れた。
そして。

「嫌がる未成年者に何をしとるんだ貴様はあーーー！」

突つ込みどじろ満載の叫びが、部屋中に響き渡った。

「お前……何でここに……？」

急に入つて来た女性を2人でポカンとした表情で見上げていると、その人はアレクさんの言葉を無視して、胸元まで伸ばされているアレクさんと同じプラチナシルバーの髪の毛を、溜息をつきながら搔き上げた。

そして、細長くて綺麗に手入れされている眉毛をギュウッと寄せて、アマゾナイトの様な瞳で私達を睨み付けて来た。

び……美人さんが怒ると本当に怖い。

しかも、そんな人がですよ？ そんな人が、怖い顔をしてドカドカと足音を立てながら近付いて来たと思つたら、長く綺麗に伸ばされた爪（鋭そう！）がやたらと田に入る手をこじりひし伸ばしてくるではないですか！？

叩かれる！ と思つた私がギュウッと田を瞑ると 。

両脇に手が添えられる感覚がしたと思つたら、体がフワリと浮いた。

「にやつ！？」

驚いて変な声が出てしました。

何事かと思いながら急いで目を開けると、私の田の前には顔を引き攣らせたアレクさんがいた。

「おこつー。」

「うつさい変態。嫌がる未成年者に、何てことしているのよ貴方は」
慌てて手を伸ばして私を取り戻そうとするアレクさんと、冷たい
声を出しながら体を捻つてその手から私を遠ざける。

そして、

「怖い思いをしたのね……でも、私が来たからもう大丈夫よ?」
と、心配そうな表情をしながら顔を覗かれた。

後ろから抱き付かれ 胸の下と腰辺りに回された手にギュッ
と抱きしめられた私は、目をぱちぱち瞬かせる。

私をすっぽりと包む、ガツチリとした腕と大きな掌。（ん？）

背中に当たる、固い胸。（あれ？）

見た目は細いけど、意外に広い肩や腰回り。（あれれ？）

見上げた時にチラリと見えた、喉の『出っ張り』。（あれれれ？）

女性にしては、少し低いハスキーナ声。（えーっと？）

そして、密着した体からは、男性が使いそうな香水の匂いがフワ
リと香ってきた。（…………これはもしゃ？）

「こんな涙目になっちゃって。可哀想に」

ぼや～っと頭の中で考え事をしていたら、クルリと身体の向きを
変えられ それから、顎を指で持ち上げられて目尻に溜まつた
涙を親指で拭き取られた。

「…………あ」

顔を指で持ち上げられ、“あるモノ”を発見してしまった。

…………あ…………顎の下に、数本の“剃り残し”が！？

女性では有り得ない太さの“剃り残し”に、この人が『男性』な
のだと気付いてしました。

その事に気付いてから、私は今の状況にハタと氣付く。
見知らぬ男性に腰に手を回せながら密接にくつ付き合い、顔を
寄せられているのだ。

カア～っと顔が熱くなる。

「あ、あの、あの、ちょっと離れ……」

「クス……かわいい。真っ赤になつて……照れてるのかしら?」

どうやら、見た目や話し方だけで女性だと決めつけていましたが
……れつきとした男性だったみたいです。

しかし……何故でしじゅ?

変態の魔の手から助けてくれた方のお顔が……段々近付いて来る
のですが……。

いつの間にか移動していた手が、私の両頬に添えられた。
そして、添えられている手に少しだけ力が入り、顔を上にクイッ
と上げられる。

眼の前に広がる美人さんのお顔が、少しだけ傾いた。

あ、唇の左端にホクロを発見。うわあ、睫毛なつが！

近付いて来る美人さんのホクロなどを見ながら、色っぽいなあ～
と現実逃避をしていたら。

「お前、いいがげんにしろよ」

初めて聞く、アレクさんの不機嫌さを滲ませた声が聞こえて来た
と、思つたら。

「ふきゅつー？」

お腹に急激な圧迫を受けて、変な声が出てしましました。
ぐるじー……と涙目になつていると。

いつも嗅ぎ慣れている香水の匂いに包まれる。

そう、私はアレクさんの腕の中に舞い戻っていたのであつた。

抱き締め慣れた腕の感覚に、ホツと身体の力が抜けた。

アレクさんの腕の中にある私と、不機嫌さMAX！なアレク
さんの顔を交互に見たその人は。

「あら……オホホホホ！ 私とした事が、その子の余りにも初な反
応に、うつかり『もう一つの顔』が出てきちゃつたみたい」

「何がオホホホホ！ だ！ 人の彼女に何をする気だつたんだよ！」

！」

「え、一つ！？ この子が彼女！？ ……アンタ、ドMだけじゃな
くて、ロリコン変態でもあつた！？ いやあー！ 気持ち悪つ

！…」

「だれがロリコンだ！ 琴海ちゃんはこんな幼くも可愛らしい外見
をしていても、22歳の成人女性だ」

「うつそ…………まだ、16～17歳だと思つてたわ」

私を見て、心底驚いたと言う顔をする人物。失敬な。

どう聞いていても、私を貶しているんですか？ と言いたくなる
ような話し合いをしている2人に、私は溜息をつきながら口を開い
た。

「あの、アレクさん、この方はどなたなんですか？」

至極真つ当な事を言つた私に、アレクさんはやつと説明し忘れて
いたことに気が付いたらしい。

田の前の人物を溜息をつきながら説明してくれた。

「ハイシは、ティミトリ・シーザー。趣味が女遊びと女装と言つ

俺の従兄弟」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7752/>

気になるアイツは……M男！？

2011年8月23日02時30分発行